尾は頭より餘計に動く。

◎電車に上等下等の區別をすると云ふ話もあつたが、上等下等てなくとも、車掌の常識て乘客を二種に區別して一輛隔さ位に同種の人を載せる方法が付くと結構だ。其譯は肩擦り合ふも他生の緣だなどゝ電車へ半時間乘合つた人が之を御緣に何れ又などゝ知已になる程閑な世の中てないから、格別な必要ない限りお互に路人的の態度を取つて居れば良いのてあるが、唯だ困るのは服裝の一點だ。泥の付いた半纏股引と、縮緬と相擦れ合ふは、假し其人を厭はない迄も甚だ迷惑な事てあらう。長着物と半纏との客別て車輛を異にするとか、そして其の意味の目標を車輛に付けるとてもしたら長月日の間には善良な習慣を付けることが出來るだらう、要するに人間の區別てはなく服裝の區別を云ふのてある。

◎厩橋て船の切符を買ふ時、向島のお祭は何處て下りるのかと聞くと『えー小松島てすか』と云ふ、否やお祭りがあると云ふぢやないか鎭火祭を觀に行くのだと云と、『今日はお祭りはありません、酉の市なら吾妻橋から上つて陸を參ります』と、不得要領



の内に一船後れて水上に浮んだ。船は靜かて墨の上に坐つた氣持、今更らに水の功德を感じて一切の思念を水に流して居ると、『吾妻橋下り』と、ごた〳〵に捲かれて上陸した。

◎橋の袂に立つて見渡すと、燒けたビール會社は悉皆莚圍の奇觀を呈して居る。五六丁先きの上流には青と赤と白の帽子別をした三艇のボートが浮んて堤には人の往來も疎らだ。立番の巡査にお祭はと聞くと、先生にやりと笑つて『日本新聞を見たのてせうあれは全く嘘てす』と、吁、我れ人の日本新聞の迂を語るを耳にするや久し、而かも嘗て之を眞と仕なかつたのだが今日以後は貴紙と三行り半だ。

◎併し酉の市へは其處の郵便局の處を入つて行けば直きだからと巡査は丁寧に敎へて呉れたので、其通りに行くと、空俥がぞろ〳〵と來るが、行く俥は皆な人を載せて走しる。多分歸りは皆なぶら〳〵と公園へ入つて了ふのらしい。

◎大分來たと思ふ頃、不圖頭を上ると、自分は今丁度凌雲閣の下を歩いて居たのてあつた。

◎此邊からは公園を抜けて注き出づる人が急に殖へて餘程賑かになつた。

◎盛裝した女共は扇位の熊手を翳して來るが、三尺餘の大熊手を擔いで來るのは見るから汚ない股引半纏姿の掃除屋と擬ふばかりな不體裁な服裝である。折角一團二團出して福の神を我家に掻き込むにあんな汚ない擔夫を御與代りとは甚だ意地の汚ない事て福の神も鼻摑みだらう。

◎巡査に方角を敎へられて、所々繩張り迄して手引をして貰つて、有らゆる階級の有らゆる男女共が白昼公々然として吉原の門を入るのは恐らく此日ばかりだらう。

◎娼婦が三階の欄に倚つて白昼公々然と、有らゆる階級の有らゆる男女のキヨロ〳〵した向面を高見の見物するのは恐らく此日ばかりだらう。

◎今日は吉原が四方の門を開ハて僅かに二分丈け人間らしい顏の生辨天樣を見せ晒らす日だ。

◎女學生が三人五人と列を作つて臆面もなく海老茶袴を吉原の京町に曳摺る日だ。

◎紅い欄杆の二階から物憂はしげに見下ろして居た一人の妓は、血の氣もなく幽靈の



樣に窶れて、見たばかりも命を取られさうな顏てあつた。

◎用もないに物見遊山氣取りて五人六人と隊を組んて毒々しく赤い着物を見せびらかして徘徊する妓もある、何れもコンマ以下の御面相である。

◎思ふに吉原は天下一の醜女を天下通用の美人にする所で、美は吉原の大門際にあるのだ、門を入る一刹那にあるのだ。

◎鷲神社境內はおかめの展覽會。ヨツトコ面の哥いが聲を枯らして『どうせ嫁に行つた晩だ、言ひなり放題だ』と三圓と觸れた熊手を七八十錢に負けて居る。一方に頭の禿げた老功者は『それは二ッ二十錢……いけませんか？　十五錢……いけませんか？　十二錢……いけませんか？　えーッ十錢にやつて了へ、付け値て御ざいます』と冷然瞬きもなく客の顏を見詰て冴へた聲を叫んて居る、買はなければ犬の糞のと他の客の前て罵つて見せる、如何にも鷲の樣なやり口だ。

◎白羽のショールを掛けて即る人目に付くバイカラ令嬢が同行の母親が不圖口を過まらした御緣て大きな八頭芋一掉の推賣談判を持込まれ、眞赤になつて母を置き去りに

逃げ出した。此の女今に嫁かば必ずや赤ん坊を置去りにして馬の脚と駈落せん。

◎何をせがんでか大聲に駄々をこねた五ッばかりの男の子の、大黒帽子に目を塞がれて鼻汁と大きく開いた口丈け見えたのがあつた。

◎丸髷、高髷、銀杏返し、桃割れなど在來の結髪は横顔と後姿丈けは一樣な美人と見せられる丈け得てあるが、束髪だと萬遍に本値が見透かされて損だ。その代り、生際の惡いのや、縮れ毛や、薄毛や、お出額へは妙だ。束髪は品になり斷髪は艶になる。

◎日本婦人の服裝は風前燈の如きものだ。昔の樣に、閑な、型へ嵌つた時代に、女は唯だ嗜み一つて生きた世なら知らず、今日の樣なお轉婆な時代では甚だ不適當だ。或るヒリッピン人が三味線が面白いと言つて嘆賞したから感心な音樂の耳を持つて居ると、思ひの外、三味線は藝妓の彈くもの、藝妓は起つて踊るもの、踊る時、紅裾を洩れて白脛が露はれるから、それが大恐悦なのだと。怪しからん、日本の婦人は世界のおもちやにされて居るのだ。

◎行く時は歸る人が多いと見たが、歸る時にも亦歸る人が多かつた。





◎凌雲閣はつい鼻の頭に見えて居て、大門から公園迄は却々の路程だ、此間不潔な町。

◎淺草公園は相變らずのごた〳〵した中をぞろ〳〵と人の歩いて居る動物的な遊び場所で何等の取柄もないが、人の俗慾の一部は必ず滿たさせる重寶な公園だ。

◎東京の公園を他のものに譬へて比較すると、淺草は文藝倶樂部、上野は新小説、芝は新古文林と、細かい觀察は他日の分として、新たに出來た日比谷公園の四時草花の清香を絶たぬ新らしい趣味は誰が手に歸するのか。

◎折角思ひ付いた、噴水から池迄の細流は一向引き立たない。所々小石橋を渡る丈けて岸邊を通行させないから第一人目に付かない、あんな淺い細流を藤棚の下など小暗い處に通じて兩岸に葉の繁る灌木を植ゑるなどは、決して巧妙な設計とは見えない。今度は芝公園へも此の筆法てやると云ふが、此種の設計は明るい花間に細流の邊を消遙させる樣に日比谷公園に施すべきものと思ふ。

◎門を拔けて仲見世へ出ると、行く人來る人が所々の路次から一時に注ぎ入つて何時も繁昌な不夜城の賑い、酔眼朦朧と兩側の店飾を見るともなしに敷石の上をからころ

と踏み行く下駄の音を耳にして、我人共に流れ行く夢の樣な氣持は、之を俗なりと云ふは未だ人生の味を知らないものである。目を擧ぐると、仲見世の外に後れ走せな凱旋門が建てられて中央は通行止。

◎ショールは大抵去年の物で間に合はしたらしく、流行り物だからこそ仕方がないとしても、三角になるのは品が惡るく、青黑い鳥の羽を植ゑたのは毒々しく。毛糸のは薄べらだ、去りとて男女共通と云ふのは後めたい。

◎此日半日の遊行何等新奇な流行も傾向も認め得なかつた、而して唯だ一人の美人をも見なかつた。

《三十八年十二月》



# 大山元帥凱旋

◎十二月十七日朝から雨が降つて路が惡い、出歩るきの大儀な余も必要には勝てないから、八時迄にと大急ぎで起きて支度をして、雨中行軍の裝嚴に西河岸町の目指した旅館へ行くと、訪ぬる人は五分前に外出したと、時計は約束の八時を過ぎる事二十分、罪は此方に在り、何うすることもならない、雨は益々降る、泣面天氣。

◎さ、仕方がない、此處迄來た序に大山大將の凱旋を迎かへやうと、先づ日比谷公園へ入つたが、雨は次第に强く、人影も疎らだ。池端の土壘の上に、蔦がからんで僅かばかり雨滴を落して居る大樹の下のベンチに腰かけて煙草を吸ひながら見下す見渡す見廻はす雨中の冬枯の光景、寒さ身に泌みて、近く二重橋外に凝く花火の音も一向氣を引立てない、段々寒くなるばかり。

◎と見ると、雨は小ぶりになつた、やがて晴れさうなので土壘を下りて廣場へ出ると此處には大砲四門を据え付け、砲兵士官が馬を乘り廻はして雨も泥も苦にしない樣子。

◎內幸町へ拔けると路の兩側に軍隊と學校生徒が奉迎の列を整へて一般觀覽者は右

へ左へ波を打つて巡査に推されて居る。仲々威勢が良い、雨位は何んでもないやうな氣になつて、○○○この樣な泥路を人に推され、巡査に制せられ、俥屋に叱られながら行けども行けども兩側に繩張りの陣取り内に人が一杯で五尺の身を寄せる立場が無い。遂ひに新橋停車場迄來たが、繩張りは愈よ嚴重、人は益々多く馬車、人車、巡査で停車場前の廣場にもぐり込む餘地がない。

◎立つて居ると直ぐ巡査が來る。三方塞がれた框の中を來た路へ引つ返すより外は無いので、巡査から巡査へ引渡されるやうに、はら〳〵して兩側の人禊の間を傍目もふらず、馬車、人車の泥を蹴返す間を縫ふて稍や混雜の薄らいだ所へ來て一息吐いて見廻はすと、此處には千住製絨所のカーキ服職工が居並んで、ズブ濡れ姿の手にした旗からは粗惡な染料の赤色がボタリ〳〵泥の上へ落ちて紫色に散るさまは、其血班々たりと見えて、雨中戰場を往來して居る氣持だ。

◎此處から右へ橋を越えると、人が餘程空いて居るので、足を留めて形勢を按じたが、思はしい所が無いので土壘へ上つて見た。雨は大方止んで、滿目盡く新橋の方を今



か〳〵と睨みあぐんで居ると、ワアーと大動搖さが起つた、見ると一人の小僧が土壘へ駈け上らうとして滑り落ちたのである。

◎土壘の上も前も人に塞がれて見晴らせないので、今度は西洋理髮店の石壇に鞍替をしたら幸と能く觀える。

◎忽然喇叭の響起つた。確か用意の號令と思ふて居ると、消魂ましい馬蹄の響と共に小旗を付けた槍の頭が十本ばかり見えて近く萬歳の聲が聞える。路此方へ一曲りして騎馬の巡査が二人、左右に分れて前驅し、其後へ槍を右の腕へかい込んだ二人の騎馬兵が物凄く鋒先を見せ、次に二十餘騎槍を右手に立て、左手に手綱を扣へたのが體を稍や伏し目に轡を駢べて拂ひ過ぎると、大山元帥萬歳の聲は霰の如く耳朶を打つて、赤筋入りの帽子を頂いて雪髮銀髯溫乎たる内に威風地を壓する巨大な老將軍は右手を擧げて答禮をしながら、雨後の沙地に車輪の軋り柔かく、微塵も動かざる大道を唯だ一分の間に路を左に折れて過ぎ去つて了つた。日比谷では裂けよとばかり大砲をつるべ放つて、響は遠く九重の天を震はした。

大山元帥凱旋

◎雨も一時は止んだ中に滿足の觀迎を終へた群衆は、今や從横に入り亂れて歸途に就く間を人波に推されて、外濠線通りに出た時は氣が清々した。

◎某店に三十分間腰かけて。還つて再び西河岸町の旅館に行くと、訪ぬる人は丁度歸つて來たばかりの處で都合能く會談を遂げた。

◎午後一時に辭して外に出ると、雨は又々豪勢に降つて居た。大手町迄歩るいて良い加減に濡れて四分間も横雨に打たれながら待たされて、漸う本郷行の電車に乘つてモウ安心と思つたのが、須田町へかゝると、前になつた車輛が五六臺動かない。窓から顔を出して見ると、どしや降りの中を砲兵工廠の旗行列が所謂旗鼓整々凱歌を擧げつゝ上野へ進行して居る。一しきり進行した切れ目を電車は動き出したが、本郷線へ乘り出すと間もなく、十餘臺長蛇の陣を布いて待てども〳〵……十八番の街鐵の停電、實は二時間も前からだと。

◎此の大雨の中を歩くも骨が折れる、晩迄には動くだらうと濟した男もあつたが、良し必要がない迄も斯んな馬鹿々々しい目を見て晏然として居る事は到底我慢ならない





から癪がて下車して電鐵へ乘つた。

◎二重橋外から上野迄亘つて、百人一隊づゝに風雨の間を濡れに濡れて、手にした旗からは何の顏も〳〵赤いものが鼻と頬と額に染み付いた砲兵工廠壹万五千の職工が、今や意地になつて聲を枯らし、帝國軍隊萬々歳を歌ふて行くのを、安全に足を休めて電車の窓から眺て、妙な邪險な、陰忍な、犧牲を以て驕傲を飾る心理の消息を彷彿の間に思ひ見て、瞬く間に廣小路へ來た。此處から再び街鐵の車輛に足をかけたが、二時間前から停電ですと車掌の宣告は余をして呆然たらしめた。

◎むら〳〵となつたのが非常の元氣を呼び起したと見えて、雨位何んだと何處て叫ぶやうにも思はれ、寧そ彼等の雨中行軍の形況を見てやらうと云ふ氣が起り、重ひ足を曳いて池畔に出た。

◎見渡すと、雨は烟の如く上野の杜を薄く鎖ざした下に、旗を打振り、聲を限りに萬々歳を歌ふ行列は、池の畔を取捲いて所々大天幕を張り、樂隊は腕を限り吹息を限りに吹奏てゝ居る中に、辨天堂の後には太い筒が六七本見えて引ッ切りなしに打揚げる

花火の音は雨に抗して天に向つて怒號する樣だ。上野台には樹木の間から一列に並んだ傘がほの見えて見物人が黑くなつて居た。

◎此の威勢に、余も暫し他家の庇の下に佇んで雨を忘れ風を忘れ、我が泥まぶれの足駄と、びしよ濡れに、泥を蹴上げた着物の裾とを忘れて、人盛んなれば天に勝つと云ふ事を念頭に浮べた。

◎根津の裏通の泥濘路へかゝつた時、丁度解散して、寒さに震へながら我家を指して駈け出す前さの職工等の蹴返した泥汁を强かに振舞はれた。

◎家に歸ると戸は閉まつて居た、明けて入ると火の氣もなかつた。

《明治三十八年十二月》



# 冬の日比谷公園

◎北陸は大雪だ、東北は大寒だと云ふ。三寸息も凍りそうな今年の冬も、東京は去年葬れの廿九日に雪が降つた限り、元日二日三日の上天氣が、翌る朝も〳〵東の雨戸の隙漏り入る朝日影が、障子に眞紅を彩つて、好くも續いた晴天、回向院の大相撲は晴天十日で完全に切り上げた例は、今年ばかりだと云ふ。かくて、一月廿日頃に、一度夕方から雨が降つて、之は往生と思ふて居ると翌朝は洗つたばかりの青空に、大日輪が常にも增して紅く大きく暖かく上つた。其後一度、雪は降つたが、寒氣烈しく吹雪となつた爲めに、人をも地をも濡さず、何時の間にか消えて了つた。余が小さき經驗の範圍內では、斯んな上等な東京の冬を見たことはない。

◎然れば、日中の日比谷公園には、樂堂の南側のベンチに、切る樣な北風を避けて、長閑に日向ぼこりして居る連中が頗る多い。流石は、ハイカラ洋式の公園——而かも、四通八達の要處にある公園丈けあつて、何となく、目前が明かるく、日當りが良いから、氣持ばかりも暖かいのであらう、上野や芝では、一寸見られぬ光景である。勿論

淺草へ行けば、何時だつて人が蛆の樣に群かつて居るが、併し足一たび、玉乘りと、芝居と、花やしきと、パノラマと、寫眞屋と、くず餅屋と、其の外圍を碁會所若くは新聞縱覽所なる淫窟とに二重に取捲かれた、妖氛圍内に投じたら、如何なる人品も、盡く一視同仁の蛆仲間になるのだから、之は人間の事ではないのだ。

◎樹木に日光を遮ぎられた上野や芝の公園のベンチに腰かけて、冬の日の午後を樂まうなどとは、餘程の茶人でも思切りが惡い。唯だ、日比谷公園へ入つて見ると、日さへ、照つて居れば、冬猶ほ春の感に打たれる。樂堂から、正門内のグラウンドの邊は通りすがりの人をして、唯だ譯もなく、足を停めて軟かい土の上を駒下足でザク〳〵と輕く踏んで見たい氣を起こさせる、何か土から今に芽ぐみ出やうとして居るものを手傳つて掘り起して見たいやうな氣持である。そして、西と北に樹木や家屋を負ふて、南と東に心持丈け低下して凹けて行く此の圓形の廣場は、日頃、寒い〻〻を口癖に、六疊ずくは四疊半、乃至は三疊の室に火鉢や行火にコビリ付いて、三寸萎んで居た體軀を、一ツ勢一杯に、此の平坦な、軟かそうな、見るから氣持好い場所へ、トンボ返



りなり、駈ッ競なり、蹠ねッ返りなり、逆立なり、相撲なり、柔術なり、なんでも可いから、心往くばかりに、動かして見たい、伸ばして見たいと云ふ氣をおびき出すのである。

◎そこへ持つて來て、丁度自分の心持を其儘に形に現はしたやうに、純白な、シャツ、ズボンの扮裝輕く、カーンと靑空高く冴えた響を反しボールを、手頃の棒で、天も碎けよと打ち飛ばす一團の仲間が陣取つて居るから堪らない、放念り此處へ入つて來る紳士淑女や番頭、小僧、女學生、扨ては潰島田と洗髮の黑半襟の粹な身粧ひのを左と右に、多少人目を忍ぶ積りの旦那連迄が、幽谷を出て〻喬木に遷つた氣に、思はず足を止めて、うつとりと眺め入る事になる。外れた球が自分の足下へ來ると我れにもあらず、拾ひ取つて投げてやる丈けの親切心を禁じ得ないことになる。

◎僅かばかりの常綠樹に、疎らに北風を避けたベンチに凭れて、ボールの飛ぶを見ては寒さを忘れ、入り變り立ち變りして、一寸足を止めては、かたみがはりに行き過ぎる有らゆる階級の種々の御面相の男女を夢見る氣に眺めながら、半日を此處に暮らす

仲間も少なくはない。

◎直ぐ傍には、凧を飛ばして居る一組の子供等が、てんてのを一番高く揚げやうと競ふては、時々からみ合をやつて人氣を引き立てる。こんな樣で、同じ人ばかりが半日も立止つて見て居るてはないが、一人が三分としても、絶えず入り代つて立止まるから舞臺面は決して淋しくならない。

◎已にして、一切を化育した大日輪も遂ひには彼處の都新聞社屋上の女神像の蔭に沒するに及んで、夕暮の寒さが、一陣り肌に浸み入ると共に、目を擧ぐれば、所々電燈が星と輝いて、公園は之より夜の舞臺を開いて、朧ろに霞んだ薄光りに入り來る者の心を被ひ包まんとして居る。

《明治三十九年一月》



# 銀座街の夜の臭ひ

◎江戸ッ子が江戸を知らないこと偶然ならず、余も銀座街を通行したことは幾度あるか知れない程てあるが併し夜の光景を今夜は一ッ見物してやらうと思ふて、歩るいて見たのは今度が始めてゞある。

◎去る日の晩、一時間ばかり人を待合はせるのが怠屈てならないので、こんな時こそと、内懐手空しく瘦肩寒むそうに、京橋を渡つて鳥居式の赤い凱旋門を潜つて、銀座街へ臨んて見た。

◎此の街前側のみ露店が立つて、明かるく賑かて樣々の香臭がする中に先づ第一に臭を撲つたのは肉の付燒の臭氣て大層美味そうだ。看板の行燈には『燒鳥』。

◎之は鳥の皮と臟腑を一寸切りにして串に刺して燒くので南風競ふたら讀賣新聞社の宿直先生は又例の怪しからんものが臭ふと嘸ぞ癪に障ることだらう。

◎第二番目は、如何にも古臭ひ臭氣て、遠くは神武東征の日、御衣の胸に掛けられた

曲玉から、延喜天暦の御世に、五條の橋際の居酒屋の店に掛けられた縄暖簾より、近くは左甚五郎の美人像、九代目の利休が愛玩した茶器一式、其他古さは千年、近さは一昨日あたりの、床飾り、花瓶、烟管筒、煙草入、瑪瑙、水晶、珊瑚樹より、茶碗、飯櫃、箸、櫛、弁、火箸、摺鉢、摺子木、灰吹の果てに至る迄、三千年の風俗、美術を一目に會得せしむべき古物商人の煙脂臭い口元が古煤けて見える。

◎第三番目は當世流行のリボン。之は、オリーブと云ふのが最新流行の色だそうだが、粗悪な品へオリーブては初めから古物の樣て、橄欖など云ふ香ばしさうな臭は仕ない、古道具屋を齒糞の黄色い毛碌鈴とすれば、之はお茶ッピイの娘子だ。

◎次なるは正味掛直なし、可しや腐つて居やうと、萎びて居やうと、中身は酸ばくあらうと、苦がくあらうと、兎に角臭う丈けは、本直を其儘の、橄欖の隣りにはふさはしい、見た色ばかりも、氣持の好い、蜜柑の陳列場、當れば崩れる鋸酒屋の姐さん的、一山百文の安物は、滅多に手を觸るゝべからず。

◎次に鼻元へ漂ふのは、些と藪臭いやうな青臭味のある。其の筈て、草から出來る雪



駄、草履の數々、體裁が良い丈けに、賣れなさそうな、煩被りの五十女は、妾、手掛けを通り越して、今は男の足掛けにもならぬそうな顔を何が大事てか殊更ら人の注意を惹く迄に深く手拭を被つて居る。

◎次に控へたのは、四角張らうと、圓く納めやうと、御名々樣のお勝手な飯臺。用のない時重寶に壁んて片付けられます丈け婦奴よりは便利て……何に、古物てはないのて、飯臺だと思ふと新らしい内から妙な臭がするのてへ、、、、。

◎次は又、古道具の臭。床の置物や、花瓶や、土器や、銅器や、凡てが、極めて贅澤な、端金では臭を嗅ぐばかりも危ないやうなものばかり。此種の上等な古道具店が、三個所目位に一つは屹度有る。何種類の人間を當て込んてかと人に聞くと、築地の異人等を得意とするのだそうだ。異人さんは、黄銅臭いのを好みますとても言ひそうな店主の顔。

◎次は當節流行の繪葉書、青赤の安物色を使つた二色三色刷りの臭氣が、咽喉をからむと云ふてはないが、其の繪と其色とは象徴的の意味て云ふ俗臭なるものが紛々とし

て、目を惱ますのである。

◎其次ぎ、其次ぎと、モウ一々見た事は見たが、頭腦に入るやうには視なかつた爲か、今思ひ出せぬ。畫では嗅がれぬ種々の臭が、左右前後から縱横に入り亂れて鼻に入り込むを物ともせず、ぶら〳〵と人に推されて、推し除けて行くと、急に眩ばゆいばかり明るくなつた。見ると、此處は勸工場の賣出して、電燈瓦斯燈に加へて、赤提灯が幾條となく頭の上にぶら下つて居る。

◎そこで、今度は勸工場へ入つたが、丁度夕飯時であつたので、素見客も至つて少なく、電燈がヒドク明るい中を、素頭で出かけた余は大變間抜けた格好に思はれて、却つて店番の女共にヒヤカされる樣な氣がした。併し、流石は銀座丈けあつて場末の勸工場のやうに、一寸足を止めると直ぐ、『何か御用は？』と、追つかけられない丈けは難有かつた。

◎尾張町の角迄行つて引返した。途中見た物の中、今も心に殘つて欲しいと思ふたものは一つある。夫れは大さ一尺ばかりの、五月人形仕立ての右大臣左大臣の像である、





ふつくりした、稚兒の樣な可愛らしい顏へ、衣冠束帶して征矢を負ふて弓を持て座つた容姿は、甚だ氣に入つたのである。

◎銀座の夜の臭は、大都の本場丈けに、凡てが他に比べて上品なものばかりであると思ひながら京橋近く迄引返した時、今後れ走せに陣取つて居たのは何事ぞ、笊、桶、盥、鉢、味噌漉、箸、串、等溢れるばかり、塗所道具一式を荷車に積んで來た、爺婆の二人連れてあつた。

《三十八年十二月》

# 余が正月

（三十九年一月）

◎余に取つて、正月なるものは大敵だ。余は第一に屠蘇の香を嫌だ、第二に味醂の味を嫌ひだ。下戸の癖にあんな甘いものを何ぜと云ふだらうが、十年許り前、郷里に居て友と二人四合壜へ味醂を買つて公園で飲んだが、甘いに欺されて大半を自分で飲んで了つた。家へかへる迄は唯だフラ〳〵した氣持であつたが、折惡しく其の日の晩から翌日へかけて佛事があつたので、午後に障子を張り替へる役目が定められて居た爲めに、寢て居る譯には行かず、我慢して障子を張つて見たが、頭が痛く、胸が苦しくなつて、遂ひには反吐た。其の時の苦しみは、酒でやられた内て一番切なかつたので、夫れ以來味醂の香を嗅ぐと、嘔吐そうになる、加ふるに、屠蘇の香が加はるに於て、到底我慢のならないものであるのに、今一ッ冷と來て居るから愈〻いけないのだ。

◎夫れから、年賀には是非袴を着けなくてはいかぬが。之も嫌ひだ。敢て人に見せ付



けるに足るべき仙臺平の、板の樣なのが無いからばかりては無い、何だか餘りに改り切つて、所謂糊食つた天神とも云ふべき規丁面な格好は、活動を鈍ぶらせるやうに思はれて氣に入らないのである。

◎加ふるに、不消化病に罹つて居るから、餅は大好物であるが、甘そうだと、目に見る丈けて、口に入れ、胃へ嚥み下す譯には行かぬ。それに酒は幾ら奮發しても一合以上は飲めぬと來て居るから、先天的正月の人たる資格が無いのである。

◎併し人間苟くも生を白日の下に享けて居る以上、習慣と撥を合はせて、人がお目出度いと言つたら、我もオー然りお目出度う君よ！　といと上機嫌らしく無理にも笑顔を造らなければならぬ。そこて余も浮世の義理には勝てず、出來そうもない正月のお目出度さを、我が身の上にも取つて付けなければならぬ。之が余に取つては大苦痛だ。

◎そこて、今年の正月は如何にして凌ぎ越そうかと云ふとは、此の大晦日を何うして越そうかと云ふことよりも、余に取つては一層の大問題てある。戸をぴめ切つて、鍵

をかけて、二階の奥に默つて、讀むなり書くなり眠るなり食ふなりして居たら、酒屋も米屋も立往生して呆れて歸つて了うだらう。だが、正月は然うは行かない、世間體があるに加へて、元日一日丈けお目出度いのなら、何とかするが、三日若くは五日間では、閉戸も不貞寢も續かない。外には賬かに笑ひさゞめく聲も聞こえ、羽子追ひの音も手に取る樣に響いて來るから、其の昔、天照大神が天の窟戸を我から開いて神樂を見やうとしたと云ふやうに、新年と云ふからには果して何か新らしくなつて居るだらうかと、我れ知らず胸を躍らして雨戸を繰つて見る氣にもなる。正月と云ふ奴は、或る魔力を備へて人を誘ひ出す美人だから堪らない。

◎先刻から、門の處に居て、表へ出て來るでもなく、家へ入るでもなく、モウ居ないのかと思ふと、チャラリ雪駄の音をさせて、玄關に年賀受けをして居る女中と、玉の樣な聲で二言三言何か應答へしては、ホ、、、と溢れる樣な笑聲を洩らす、彼娘確かに振袖の下に羽子板を隠して居るに相違ない……オッと出た〳〵……いや又引込んだ、此の罪造り奴！　乃公が今、明治三十九年の第一日に、齋戒沐浴した精神を籠めて、世界を驚かす傑作を書かうと一大發心をして、滔々たる俗人輩が、屠蘇機嫌に家を飛び出して風船玉の樣に輕い軀を飲み廻つて居る間に、斯うして隣りの屋根からの初日の出を拜みつゝ、机の傍に炬燵に溫まりながら、紙を展べて筆を咬んで居るのに、何事ぞ先刻から人を生殺しに、出るでもなく、入るでもなく、折々彼の艶かな高髷姿を見せ付けるとは怪しからん。何うせ二十世紀だもの、元日早々乃公に惚れるとは云ふのなら、早く然うと極めて呉れゝば、我輩とても贔がては世界の文豪にも出世仕やうと云ふ文士だもの、夫れ丈けの粹は利かして、午後からでも熱海の梅を賞すべく新婚旅行を仕兼ない譯でもないが、唯モウ羞かむ一方で、門の扉の蔭から雪駄に物を言はせるばかりでは、實に困る、焦れつたい。軟玉溫香と言つたを其儘に彼の品の良い豐くりした頰からは露が滴りそうで、僕はモウ全く魅せられて、戀の甘さ苦みを味はされて了つた、此の情味描くべからず、語るべからず、僕はモウ此の紙を裂いて此の筆を折つて彼女の無情を怨まなければならん、寧そ一思に此の小刀で彼女の無情な心臓を刺して、悲鳴を揚げて倒れたやつを彼の櫻色の頰肉一片を切り取つて、刺身

にして酒の肴にしたら、之は念が晴れて未練も無くなり、屹度大傑作を書き得られるだらう……何にッ惨酷だと！　ニイチェの本能主義とか言ふのにはそんな樣な一節があつたらうが！

――かくて元日の午前半日は無駄になつた。

◎午後になつて大酒客が舞ひ込んだ。

『今偶然窓を開けたら、後姿が君に似て居たから、以前の家へ行つてまご付いても困ると思つて呼ばせたのさ。』

『然うか、實は彼方の家へ行つたら、標札が替つて居たから、はてと思ふて、以前居つた人は何處へ行きましたと聞くと、知らないと云ふぢやないか、て、僕は薄情な奴だ、引移しても知らせも仕ないでと思つて行くと、後ろから僕の名を呼ぶ聲がしたから引返して來たと云ふ譯さ……。』

『いや、同じ町内で、而かも只四軒先きへ移したのだから、何處へも通知せずに、郵便は以前の番地でも届くと言つた譯で、君へも逢つた折に話さうと思ふて居たのが、



遂ひ逢はなかつたもんでな、何にせ、君の後姿が僕の目に留つた丈けは仕合せだつたよ。』

『然うか、僕此の正月は何んだか運が善いのだ、だが、酒はあるか、正月をして居るのかい！』

『酒は表の酒屋に幾らも有る、君は酒飲みだから大に之から酒の正月を仕やう。』

かくて飲み且つ語つた。客の言ふ所は、昨夜から人の家へ行つて居て、飲んで寢て了つた、今朝目が覺めると、又酒を飲まされて、今我家へ歸りがけに君の所へ立寄つたのだと、そして家には婦と書生とがまだ朝飯も食はずに僕の歸るのを待つて居るのだ、僕、今、家へ電報を打つて來たから、何に三時迄に緩りして歸つても良いのだと。何と電報を打つたと聞くと、安心しろだと。午後三時迄空腹を抱へて安心の樂地に優遊せよとは、酒飲者にして始めて解し得る妙諦だらう。何て安心させるのだと聞くと、今壹圓取つて來たから、之れて一家揃ふて晩に正月をするのだと。戰勝國の正月は太平樂なものだと熟々酒飲者の呑氣さ加減を羨んだ。

余が正月

此日天氣晴明北風切るが如し。

◎二日にも、天氣快晴、北風凍烈を極めた。近所の子供等は朝から凧を飛ばして、絡驛往來する廻禮の客を惱まして居る。日當りの良い二階の南窓から、凧を揚げるのを見ると、此處に人間の事業なる者がいとも適切に縮寫されて居る。櫻や梅や松、檜など、兩側から枝を逞ひ出して居る狹い街道を、長い尾を曳いた凧が、僅かに安全な高さ迄揚がつたから、良い鹽梅だと思ふ間もなく、直ぐ絲を出すから長い尾は忽ち樹の枝に引ッ掛つて了ふ。夫れを其儘にそつとして置いて、竹竿でも持つて來ると、譯なく取れるのだが、子供は唯だ無茶苦茶に絲を引ッ張るから愈よ引ッからまつて、遂には、骨は骨、皮は皮の最期を遂げる。絲を手繰ると、出すとの加減が全く間違つて居るのに加へて、一たび樹の枝に引ッからまると、直ぐに急いで引ッ張る所に失敗の原因が伏在して居るが、凧を揚げて居る本人の子供等には、其邊の消息が會得仕得ず、本人は一生懸命で後へ〳〵と泥溝へ落ちるも知らず、早く蒼空高くへ揚げやう〳〵とあせつて居るのだ。



◎余は少時凧を揚げる事が大好きであつた。今ても少しも嫌になつては居ない、唯だ人間が大人になつた丈けに、まさか一枚二枚の凧を引き摺る譯には行かないのである。東京では西の内十二枚十六枚廿枚と云ふ凧を揚げる丈けの風が出ないから仕方が無い、余が鄕里は雪國であるから、舊曆正月から、春の雪解時期へかけて、毎日の晴天に毎日の西風だ、其の風は凧を揚げるに丁度適した風だから、雷鳴を發する小氣味の良い凧は、毎日無數に、洗ひ出した春の大空に天に屆く程の高さに揚げられて居る、此の靑天に屆く程と云ふ所が、余をして身震ひする快感を味はしむるのである、人智如何に發達しても人は未だ足一尺と地上を離れることを許されてない、唯だ凧なるものあつて昔から人の感想を高く天に運ばしめて居る、凧に依つて人は僅かに、地を離れて天のものたらんとする感情を癒されて居る。加ふるに、限りもなく廣く深く遠い、唯だ一色の蒼空なるものは、余に取つては神秘、幽妙の樂園である、そこには何等の文彩なくして余が慾する文字を恣に容れしめて嘗て盡きざる空想の廣野がある。余は常に蒼天を以て余が心とし、將た命として居る、蒼天を望むのとき、余は一

切の思念を拭ひ去られて、全く無我に自然の懷に抱かるゝの感を得る、而して余が此の蒼天と極めて神秘的な、將た詩的な交渉を遂げ得るは唯だ一つの凧なるものに依るのである。詰り凧を揚ぐるときに余は自ら凧となり、さうして蒼天と同化するのである。

◎思ふ、鄕里の春三月の末頃には、嚴冬の間降りに降り、積りに積つた數尺の雪が、來復の陽氣に解けて、先づ家の周圍、垣根、樹の根方から次第に土を露はした處に、鮮かな綠の草萠え出て、春風春水一時に來り、纏がては所々斑らに殘雪布ける殿樣時代のお穀倉跡の廣場に、遊び仲間數十人となく集ふては、各自に手頃の大凧小凧を春の大空に高く〳〵飛ばして、鳴聲を競はした心とときめく快心の光景を余は今も折々の夢に見て、覺てはいとど人生歡樂の夢より果敢なさを思ふて憮然たらざるを得ないのである。

◎晩になつて近所の子供等が來てかるたを取つて十二時迄も夢中に騷いだが、余に取つては甚だ心たゆまるゝ氣乘りの仕ないものであつた。



◎三日にも亦快晴、加ふるに、昨日一昨日の樣な風もない、實に四海波を擧げざる穩かな好天氣、冬の時節とは思へない。余程の出不精な人間も、今日は一つ何處かへ遊びにと謀反を起しそうな、人を嗾のかす樣な陽氣である、正月二日迄拗ねて見たが、世間では如何にも喜ばしそうに、樂しげに、美い着物を着て、酒機嫌で浮かれるのを思ひ見ては、机の前に坐つても、一頁讀めず一行書けずに、多少燒餅機嫌にムシャクシャ腹が非常な元氣を呼び起して、今日は酒でも飲んでやらうと、櫛勢凄まじく朝九時に一年振りの袴姿で家を飛び出した。

◎嫌な冷たい屠蘇も飲み、樽臭い酒も飲み、足が棒になる程歩いても見、蜜柑も澤山に食ひ、やうかんも一竿の三分一ばかり味ひ、終にはうどん迄食ふて、例のかるたと云ふやつが始まるや否や、雲を霞と逃げ出して、我家に歸つて、之れて先づは新玉のなんとかを滿足に目出度申納めた。而して今日一日混亂させた胃を、寢ながら丁寧に擦つて見て、余が詩人でもなく、仙人でもなく、以て飲食の料を得る者を名くべくんば、所謂文士と名乘るべき、コンマ以下の俗人であるだらうと、何やかや考へ疲れて

は翌朝近夢なき眠りに落ちた。

◎『四日』。起きて飯を食ふて見たが何だか氣が落ち付かず、手に物が付かぬ、消防の出初式を見物仕やうと池の端へ出かけたが、出やうが遲いので、形勝の地はこと〳〵く、我と等しくお目出度い阿呆面のした、脊伸びをして口を開いて居る大多數の善男善女等に占領されて、ゆけども〳〵下駄へ泥が粘ばり付くばかり、群衆の後に立盡くして、江戸ッ子の最大の傲りとする、木遣りや、纏振りや、梯子乘りなどの大藝術を詳かに拜觀するの榮を得なかつた。これは元日來の極めて微細な遺憾なるものである。

◎併し三四丈高い藁圍ひの櫓へ火を掛けて、夫れへ横から糶り上げ機械梯子を立てゝ、水を注ぎかけた新式の消防術は、如何にも氣持の良い、腑に落ちる藝術で、新年諸雜誌に出た所謂諸大家の作物を讀んで見ても、此の機械梯子術以上の傑作は、唯の一ッも無い。若し余をして何が最快心の職業であると言はしむれば、此の糶上げ梯子の頂上から、一本の水管を振ふて、猛火と戰ふ事であると斷言するに一毫の躊躇を要しな



いのである。十年前からして余が理想の職業は火事場の筒先掛りであつた。筆を振ふて世と戰ふに於いて、此種の糶上機械梯子たるべきものを發明仕やうと、余は今焦慮しつゝあるのだ。

◎此の快藝術が終ると、午砲が鳴つた。そこで公園を拔けて廣小路へ出て、模範と銘打つた上野凱旋門を拜觀したが、余は此時切に〳〵に、嘗て新小説かに出た、故綠雨が、馬へ乘つた神女の圖へ熱罵評を記した口繪の事を思ひ出して、此の模範凱旋門の寫眞を駒込吉祥寺の墓石の下へ送つてやりたいと思つた。例へば『此の獅子の顏はべそをかいて居るに非ずや。』『此の馬の形は盆祭に拵ふ瓜や茄子へ箸の手足を付けたものに似たり』『此の門内、天井の壁畫は西洋の大家の傑作であり能ひし物の、單なる外形を逐字的に直譯しなせし所の、若しも夫れが、東洋的の語を借つて形容するであらうならば、獅子を描いて狆に類せしものと言ふべき事の其の事が寧ろ適當であり能ふと云ふ事を私は言ふを敢てする』とても例の金釘流の天下一品と云ふ字體で評語を付せられた黄泉郵便が來たら面白いだらう。余は茲に改めて靈魂不滅を唱へたい、特

に豪い靈魂が、個體として永劫に不滅に、此の世を批評して、誰人か後人の口を假つて語りつつあることを唱道したいのである。

◎郷里から知人が出て來て、上野の凱旋門を見ると胸が惡くなるが、あれは何の點が模範なのてすと、眞面目に切り込んだから、余は眞面目になつて、あれは、日本美術家の腕前の模範を示した凱旋門てあると云ふ意味の模範凱旋門てすと答へると、東京と云ふ所は文句ばかり六ヶしくて駄目だと罵倒された。

◎俗に入つて俗を超脱仕やうと云ふ小理窟を付けて、上野から淺草へ廻つたら、飲まない積りの酒迄二三杯飲んて、夕方我家へ歸つた、大して面白くも笑止しくもない生溫い日てあつた。

◎五日にも矢張り手に物が付かず、硝子越しに終日蒼天を望んて一年分の覺悟と元氣を付けやうと力めたが、考へれば考へる程氣が減けるばかり、豆腐屋の觸れ聲も震へて聞こえる。平和な新年だか、平凡な新年だか、兎に角、一生の間、一寸前は知られぬ闇の世の、生れて以來三十年目の新年である——少なくとも余に取つては。』



## 〜コンノート殿下歡迎會雜觀

◎途中入場券を貰つて、袴を借り着して馬場先門の處へ出た時は午砲が鳴つた。

◎燒打騷ぎの有つた日の光景は見ないから知らないが、從來日比谷公園附近に、斯程迄人群りしたことは余に取つて覺えないので、今更らに、己が住宅には一坪の庭さへもなく、隨つて市中に一寸した催しがあると、我れ前さにも出かくる愚婦愚夫の多く、大名行列があると三日前の新聞紙て囃したのが種になつて、實に字義通りの老若男女が家を明放して三菱の原に詰めかけた馬鹿さ加減に呆れ果てた其の馬鹿の一人として余も人波に推されて、何時の間にか幸門の處へ來た。

◎入場券の難有さには、難なく會場の一部、一般觀覽者席の繩張り内に軟かな砂を踏んで、腰掛け一ッあるてないから、幾ら迂路付き廻つたからとて體を休める便りもなく、人眞似に有樂門から這入つて來る貴賓を、背伸びをして見て居るなどは余り氣の利かない藝當である。

◎一群の女學生、十五、六、七才の行燈袴連中が人襖に遮ぎられて何うせ何にも見えぬからと、引率して來た學校の校長か教頭とも見える五十近の髯のある高帽を取圍んで、喋々喃々秘術を盡くしておしやべりを闘かはしたが、此の髯君の傍若無人流の好笑的高聲の縱談は、時に取つての一興であつた。

◎何組、何會、何部、何區、何團、何社、などと染め抜いた紅黄紫青の旗は場を蔽ふて、身は昔の御陣立の錦繪の中にある思ひ、加ふるに、庇髪、丸髷、高髷、紫被布などの女隊が、だんだら染めを織り交ぜて居る景氣は、頗る陽氣なものである。

◎會場に建てた、コンノート殿下の便殿としての模擬紫宸殿は、窓などは全く寺院式で、可なり大きいものである、六日掛つた中四日は雨降りて碌々仕事が出來なかつた



と、夫れにしても太閤の一夜造りの城は豪いものであつたらうと思はれる。

◎貴賓等が御馳走を食べる間、今に降り出しそうな空を眺めて、北風に吹かれながら當てもなく退屈凌ぎに迂路付き廻る人間の役目も、餘り立派なものではない。

◎大名行列は氣合が乘つて居ないから、愈よ阿呆らしいものに見えて、宛るで茶番だなと、一人の書生が言つたら、一同にワアー……とドヨめいた。

◎元祿踊りと云ふので、人の頭の間から割り窺きをしたが、青や赤や紫や、目も覺むるばかりな衣裳の端が折々ちら〳〵と見えるばかりであつた。我輩を以てすれば、日本は武士道よりも、藝妓道を以て世界に嬌名を馳らすことが至當だらうと思ふ。

◎『見えないわ〳〵』と、愼み深く、人襖の後に立つて居るハイカラ粧りの娘を見せて上げませうかと學生が抱き上げてやるのを、側からやんやと囃し付けたり、然うかと思ふと、若い娘二人の、風にも堪へぬ嫋々しい右と左の肩へ、己が手を載せて、突つ立ち上がつて、元祿踊りを見てやると云ふ豪氣な艶福者が居る、會場の區分にと杭へ三尺の高さに横に結い付けた丸太へ上つて見通そうとて、人目も恥ぢずお轉婆な藝を

やるお嬢さんも居る。何うせ見られぬと諦めて、悄然として居る婦人を、後から物も言はず抱き上げて、さア御覧なさい、見せて上げませうと言はれて、三十女のポウと上氣して恥かしさが一杯、碌に向ふを見もせずに、モウ澤山てと、只管に藻掻いたのもあつた。鳥の樣に、横に結へた丸太へ三十人ばかり一列に上つて見て居たのが、繩が切れて、ドタリと屏風を倒すが如きものなど、源水の獨樂廻しや、誰やらの玉突き藝以上の珍なのが續々として起こる。

◎四時頃開散になつて外へ出たが、日本橋邊では今に大名行列が來るとて、群衆が波を打つて右往左往に推し合ふて居る、聞けば大名行列は京橋尾張町の角で解散したのだと、何にせよ近頃例のない人騷がせであつた。

《三十九年三月》



# 僕の價値

人間らしい巾を取るのは柄になく、小刀で机を刻みながら、ぶつ〳〵云ふのは僕の第一の價値である。

生れて以來三十年、未だ立つて歩るく外には何等の能も無い、それで、塵芥溜位の何代か大切に保存して來た財産を、先づ畑地から漸次に食い潰ぶして居る一家の戸主である。性極めて、單純、癖極めて無精、輕卒なること、無頓着に似て、而かも小心翼々區々たる事を氣にし、追ッ付け、食へなくなつたら、見るばかりも厭な乞食と云ふものを親子揃うて門付けしなければならないのだらうかと迄、取越し苦勞する程、行届くにも似ず、細かい事には少しも目が利かず、何事にも八分目で行止まり、大抵の事は、さ仕方がないと、泣寐入りに諦めるから。原稿を取つて呉れないからとて、意地汚なく業を煮やして、人の顔へ唾を吐かけるやうな事もなく、極穩當で居らせられるから、向角のパン屋の婆さんが、冬は「お寒う御ざい、」夏は「お暑う御ざい」と、機

嫌能くお世辭を言つて呉れる。之が僕の第二の價値である。

面倒臭い、大儀だが、前きに立つて、第一、朝暖かな臥床を離れ起きて、齒を磨く冷たい水で顏を洗ふから、碌な御馳走もない飯を食ふて、夫れから新聞を讀む、手紙を書く、炬燵へ火を入れて、机の前へ坐ると云ふ迄の面倒たらない。扨て、机の前へ坐つてからは、地獄の苛責だね、苦しい夢を見て、碗きに碗いて、自らの肉を殺ぎ、骨を削る樣な思をして、漸う書き上げたものを讀み返して見ると、一言なし、唯だがつかりする丈けだ。軈て午飯になる晩になる。其間に起る些細な事柄は、凡て面倒臭いうるさいの持ち切りて小氣味の好いことゝ言ては、先達ての地震騷ぎ位のものだ。どうも僕には生きて居ると云ふことは、非常に面倒臭いので一ト月も前から心支度しなければ、酒屋の勘定も拂ひたくない、況んや時偶ま机の下を掃除するに於てをや、新聞雜誌などを整理するに於てをや。近頃ては、間斷なく墨を磨つて、濃淡を程良く筆に含ませる日本流義が面倒臭いから、墨の元と云ふ、インキ徳利入れのを買つて來て用ゐたが、買つた翌日袂が障つて、墨汁盤の上へ淋漓と注がれたのを、拭くのが



面倒と反古を一寸當てがつて置いたまゝ、三日を過ぎて、それを取り除けやうとしたら、盤の皮共剝げ起きたには稍や閉口した。すると、其翌日、別段惡意有つての所業では無いが、時に利あらず、今度は赤インキが、又も袂に障つて本箱の上から眞倒樣に鮮血を迸らした。昨日の今日だから、幾ら無性の僕も、赤恥を長く坐邊に留むる事は思ひ切りが惡るく、大奮發で拭いた効驗は靈たかに、不思議と痕もなく奇麗になつたは、僕近來の大出來、難かしく言へば傑作だね。之れから聯想すると、拙く出來た原稿を、人目に觸れぬ間に、潔く一擧灰燼に付するのも、大した傑作の部て、此種消極的傑作をやる意氣がなくては、積極的に一世一代の傑作を後世迄書き殘す樣な文豪にはなれまいと、斯んな、猫が急に虎になつた樣な氣焰を吐くあたりが、僕の第三の價値だ。第四、第五、六、七と今に價値と價値とが鉢合せをして、大道店とは些と異つた、余程シンボリックな滑稽が始まるかも知れぬから、あてられない樣に用心を願ふ。

斯樣な、甚だ突柏子の氣變りする僕の想像は、其昔の丁抹の皇子ハムレット君のそ

れの如く天馬空を翔つて、乍ちにして、英雄とも、偉人とも、佳人とも、才子とも、泥酔漢とも、肺病患者と、發狂者＝丈けは、眞平御免僕は十年不治の胃病一ッてモウ〳〵澤山だ＝ともなつて、四通八達、八面玲瓏、ぬらりつるりとして、遂いには、擾み所もなく生吠と共に本の空阿彌に歸つて來ること奇妙、夫れて鰻にもならず、鰌髯も生へず、十年一日の如く、身體中を殘る隈なく、血が循つて居る處が、僕の第四の價値だ。

能く考へて見ると、僕は封建時代の人、家庭の人、絶對的服從の人と出來て居るので、僕の親父は、僕のことを愚劣無能、好く笑ひ好く泣く、やくざものとして、何時も〳〵小言を言つて死んで了つた。併し、其實、僕は親父の希望した通りの人間に出來上つて居るので、親父は地下に在つて今頃は無上の誇りとして居ることだらう。之は親父の方の價値であるが、僕は家督相續と共に親父の價値も承繼ぐ權利があると思ふから、之は臨時增刊の部として僕の第五の價値に編入する。

詰り、僕を呼んで、無能と言つたのは親父の勘違いで親父の云ふ通りにして行けば



僕は到底、愚劣な無能な人間となる外は無かつたのだ。此間には、親父の方に大なる矛盾の價値がある。即ち、封建時代の頭腦もて、自分の封建的一生を標準にして、僕の養育をしながら、今日文明開化の自由競爭の世に僕を當てはめて、やれ愚劣だ、無能だ、と云ふのは、其非親父に在つて、僕は清淨無垢だ。だが玩味すると、此の邊から親父の矛盾の大價値と云ふのが生ずるのであるて、僕は、引續き臨時增刊の部に之れを第六の價値として着服すると共に此の眞實僕の無能な所は、世間の口の惡い手合からは、間抜け、阿呆、馬鹿と言はるゝ者の、其實却つて人の同情を招く恭謙の德らしくも見えて、大した價値を爲して居るのだから、之は僕の第七番目の矛盾の大價値で、第六の着服した分と鉢合せの償値に成つて居る。

モウ延引きならぬ處迄、猫撫聲で推し詰めてから、只て金呉れ命呉れと、同情と云ふ難有い他人の寶を自分の楯にして突つ掛かるのが、今の處世法だ。夫子溫良恭謙讓て引つ込んて居ては何時迄經つても決して自分へお鉢が廻つて來ない。昔は殿樣から確固不動に戴かせられる分と云ふ者が定まつてあつたから、食はねど高揚子など無駄

口も叩かれた者の、今ては、自由平等、取り放題、高望みせぬものは遂いには低望みも遂げられず、ベソを掻いた處て赤兒の泣く樣な威勢は出まい。何うも皆なが取る丈けの巾が無いのだから、互に推し除け取り合はなければ四人詰めの、本郷座の桝見も出來ない。德を積んて默つて居ては、身が光らない中に口が干るからね。そこて、僕は第八の價値を、此内から何うして見出して可いのか途方に暮れたが、此處は一つ思ひ切つて、一世一代の蠻勇を振ふね、そして、我こそは天下一の大天才だから、大に用ゐよと、自ら覺束ないながらにも、急せと自分を賣り付けるね—原稿賣り付けの經驗ある人は疾くに御存じだらうが此の場合若し世間が彼れ之れ言つたら、貴樣達は人を識るの明が無いのだと必死に啊喝するね、大抵の人間は病犬扱ひに逃げて了ふ、而して僕の第八の價値は隆々として昇るね。

だが、眞實を洗ひ晒らすと、僕は身體相應に勉强もし、我慢もする事が、可し出來るとしても、自ら進んて自由競爭の仲間入りする素養は無いのだ。唯だ必要に迫られて冷汗を流して綱渡りする思で、人の遣り口を見眞似て居るので、大方の敏腕家が極



く平氣てやつて居る事を、何か非常に不德な破廉恥を行つて居る樣な氣て戰々兢々てやつてのけるのだ。其度に、僕の髮の毛は幾らかづゝ白くなる、同時に腦味噌は幾らかづゝ減る、頭の中に隙が出來る、そこへ風が入る、其度に僕は風邪を引く、直ぐね。一つが出るなどは、稀や、う足らぬ假名違ひの、第九の價値だね。

だが、斯んな影の薄い樣なことを言つて居ては、立身出世は望みがないやうなもの、僕は敢て美い物を着て美味いものを食ふのが厭てはない。唯だ、無茶苦茶に吠へたり、唸つたり、泡を吹いたりする樣な、餘計な脂肪がないから、人を踏み臺にして赤兒のやる樣に『高々々！』をやつて嬉しがる氣が仕ない。其の代りに細く長い自尊心＝外から來る物に對抗する防禦的の名譽心と云ふものが、ポツチリ有つて、それが、時あつて非常な價値ある行動の動機となる。僕の眞面目な行動は、凡て此の名譽心一ツから湧き出づるのだ。之が僕の生命てあつて、五尺の病軀を帝都の砂埃の中に突つ込まし め、拐にも無い巾を取らうとして、徒らに困頓煩悶、小刀て机を刻みながらぶつ〳〵云ふ樣な滑稽悲劇を演ぜしめたのは、皆な此の一念の所業てある。無理にも進、

んで取らうと云ふのではなく、打つかつて來る有らゆるものに對抗する準備を整へて置こうと云ふのである。自分は、平らな地盤に竹竿を備へて居て、屋根から惡戯をする者があつたら、臀を突いてやつて、其奴に兩手を合はせて拜がませてやらうと云ふのが、僕の理想的處世法である。之が、僕の第十番目に來る正味の價値で、僕は之で以て獨歩しやうと思ふのである。

斯んなやうな價値ばかり澤山に持つて居る丈けに、僕の性分は極めて呆氣ない、實際惱んで至當な者をも當座の熱が冷めると、どうしても憎めない。何故か飽きぽくッて、長く一ッ物に執着することが出來ない。僕の軀には疳の虫が入つて居ないのだらう、此の性分は、お人好しと云ふて、現世に何事をも仕得ないのだ。絶對的服從を最上の美德として封建時代の高等奴隷として、僕の如きは一點の非が無いのだらう。無學盲從の武士道の精髄を、僕は忌憚なく服用したので、此の精髄のドン底に、前に述べた消極的名譽心が微かな光りを洩らして居る。だが、此の名譽心は、今日自由競爭の世には賓丹位の功能もなさそうて心細い限りである。生れて弱性なのへ、幼時から



唯だ〳〵柔順にと養育されたのだから、之を素養の上から察すれば、僕は封建家庭の從屬者として、一番適したものであるが、今日の世にそんな素質は、一片の麵包をも產出し得ないと悟つて、半生の素養を一拋、丸裸になつて料峭二月の寒天に立てば、五體戰へて齒の根も合はぬ憐れさ。若し、幸にして、扇子で輕く額を打つことが巧ければ、幇間にも結構、常陸山位の格幅があれば、伴食大臣には更らに宜しく、不幸にして其の系統に生れたのなら、華族の若樣にしても一人前はある、過つて富貴の公子と生れたのなら文士の二三千は、孟嘗君が古澤庵と茶漬に食客の饑い腹を癒させた位にはしてやれる大した義俠家にもなつて、それは〳〵の生佛樣で、一生が極樂である べき筈を、あたら貧乏士族の末の子と生れたのが、財產家の馬鹿息子と生れたのと對等價値と云ふ第十一番目の價値である。

以上、十一の價値を數へ立てゝ見たが、唯だ一ッ足らないのは、僕不幸にして今ては何うか知らんが、一頃は腐つた魚の腸よりも良いものに、在方では可なり珍重された、何校其校の文學士と云ふ肩書きを持つて居ないから、雜貨屋では、以上幷べ立

てた僕の價値を買つて呉れない。なる程、無理も無いことて、目次を見ても、文學士何の誰と出て居ると、唯モウ無性に難有くなるからね。人生は、廣告なり、看板なり見て過ぐべきものなり、飲んで暮すべきものなりと廿世紀の阿呆陀羅經に書いてあるが、惜しいかな、學士の尊號なく、金なく、能なき僕は、廣告すべき學問も無く、看板になる丈けの肩巾もなく、五尺八分の身長を危く國家の干域にもなり損ね、恨みもない小刀で机を刻みながら、三尺の窓底に終日坐して蒼天を望めば、我が領分を大きくなれ〳〵と際もなく環を畫く鳶のそれにも似たる、夢よりも果敢なき空想の、描けども〳〵、一ダースに今一ッの最後の價値は成らず。

《三十九年三月》



# 刹那の空想

『或る男が夏の夕暮、獨り留守居の腹は減る咽喉は渇く、金棒引きの嘴奴、何處を今頃ほざき腐つて居ることかと、椽前さに蚊やり丈けは仕つゝ寐轉んて居ると、蚊が來て頬を刺した。忌々しい奴と、頃合を見斗つて打潰すつもりが、蚊は疾く逃げて、我と我が頬をいやと云ふ程打つた。爆となつて、己ッ其儘に……と、傍らにあつたコッパを火鉢に突つ込んだが、一寸には煙も立たず、蚊は簷の邊に飛び退いた。畜生何んの逃がして……と起上りさま横に取つた石油罐を倒まに火へかけると、パッと炎え付いたのが障子を嘗めて、あなや全屋炎上つた時、蚊は已に隣地の欅に遁れて繁つた葉の蔭から背伸びをして今夜は大したイルミネーションが點いたと血糞を動悸つかせながら此方を眺めて居た。』

# 大狼狽

『若し居ない後て何か變事が起つたら何う仕やう、例へば營内の火事とか、若くは露艦の來襲……と言つて、此處は青森灣から十二里も距れて居るのだから、そんな心配は無いのだが、併し、若しも俺れが出た後て何か變事が起つて非常召集が始まつたら何う仕やう！

だが、まさか其樣な事が有つて堪るものか、平常の日曜休と異つて、今日は入營以來の慰勞休暇だもの、可しんば少じ位の反則があつたにしろ、寛大に見遁がして呉れるだらう、そんなに、こせ〳〵取越苦勞を仕やうものなら夜だつて碌々眠むれない譯だ、一ッ今日は思ひ切つて行つて見よう。先の日曜にだつて『家へ行つて見ろ』と皆んながあんなに勸めた位だもの、今日は思ひ切つて一ッ、……あー好い天氣だ、春だ霞だ朝からぽか〳〵する暖かさだ。入營してから今日て、えーと十二、一、二、三、四と



一寸の樣でも三五、百五十日になる。我家ては毎日〳〵俺れの噂ばかりして居るだらう、いや今日は何うあつても一ッ思ひ切つて我家へ行かう。

あらッ、皆ながモウ出かけるんだ。佐藤が——オヤ彼奴昨夜から家へ行く〳〵と寢言にして居たつけが、モウ行つたのかしら？吉田も出てしまつた！あら長田の奴、誰れかを待合はせて居るな、何時も呑氣な顏をして居る。……や、モウ誰れも居ない、營内は空になつた、俺れも出やう！否や行こう、思切つて一ッ我家へ行こう、何に心配することがあるものか、願出てないたつて刻限迄に歸れア良いんだ、ぐず〳〵して居て二番汽車に間に合はなかつたら、虻蜂取らずだ。何に行こう〳〵……えーと二番迄には一時間と十二分……十二秒か、否や十秒になつた、そら九秒になつた、此針性急に動くなア畜生！斯うして居る間も時間が經つ、早く行こう！

帽子はと……否や既うに冠つて居たのか、劍……も此腰にぶら下つて居る、夫れから外套……雨なんか降るもんか、斯んな好い天氣に、而かも春だ。あー、何んだか胸が動悸する。

一ッ思切つて兵營を飛び出した一年志願兵尾澤雄一は、三々伍々途中で逢つた仲間等への敬禮もそこ〳〵にして、浮足宙を飛ぶ思に、五尺三寸、甲種合格十五貫の體量を毛の樣に輕く、東北端の雄鎭第八師團所在地の弘前停車場に運んだ。

親不知を渡る程の思ひで、婆さんの足迄踏んで漸く買つた切符を潰るゝばかりに右手に握つて、扨て顏を擧げると、カタリ〳〵と緩やかに秒を告ぐる大きな掛時計は、冷然として急ぐ人の心を嘲笑ふ樣子、發車には未だ十五分ある。其筈て列車は未だ來て居ない、ポケットから時計を出して見ると自分のは六分と三十秒ばかり進んで居る。

『オヤ此處のが後れて居る、不都合な、……俺れのは正確保險附の二十圓物だ……一分を爭ふ汽車發着の標準となる此の大看板が六分も後れて居るとは實に不都合千万な、……だが待てよ、俺のは昨日一寸とまつて居たのを良い加減に廻はして置いたのだつけ。今來る途中、局のと合はせる積りが遂い忘れたもんて、之れア俺れの方が却て怪しい、……戻そうかしら、併し進んて居る位は大した不都合もなからう、……だ



が一體正確と云ふことは軍隊の規律……と、志願兵は上を見下を見、戻そうか、戻すまいか、二十圓物の龍頭を頻りといじつて居ると、

『オイ尾澤！』胸に徹へる呼聲と共に、肩を打たれて吃驚り振り返ると、

『貴樣何處へ行くか、家へか？』

先刻營舍構內で誰れかを待合はしてあつた長田と云ふ、自分と同班の矢張り一年志願兵なのが、今一人、之も兼ねて顏を見知つて居る二等卒と腕を組み合はせて立つて居る。

『うむ……何に……』と怪しく顫える聲を、强いて平氣を裝ふて輕く笑に紛らそうとしたが、自分ながらも調子が整はないので、

『何處へ行くんだ二人て？』と、一ッ大元氣な言ひ振りを試みた。

『なに、一寸湯て遊んて來やうと云ふ寸法さ』と、二等卒は喜び溢るゝ聲に引き取つて『慰勞休暇だ、平生の樣に市中を迂路付いて臭い妓を買つたつて埋まらないから、今日は一ッ大に氣張つて、湯上りの迷はす姿をチ、テン〳〵てなこと、大鰐（溫泉場

の名）の湯女ッ子が國家の干城樣を待つて御座るんだ、なァ長田』と、腕を掌つて居る志願兵を見返つて、

『貴樣は然ら言つて俺れを此處迄引張り出したんだな』

『あれだ、何方が引張り出したんだか……叶はない男だ、ま仕方ない、なんても柔順しくして、向ふへ行つたら俺れの命令に服從することだ』

『いや其の服從なら疾くにして居るんだ、第一此の赤切符だつて君が取れと云ふから取つたんだ。一體俺れの作戰計畫なら、中等で以て彼の別嬪と合乘に仕やうと云ふ寸法だつたぢやないか、ねー君、』と、彼は尾澤志願兵に目配せをして、屹と中等控室へ蕩ける樣な目を注いだ。其處には何家の何子と銘打つた身粧の、島田髷の尤物が、麗色傍りを拂つて扣へて居たのであるが、今此の二等卒の傍若無人の高聲に場內の視線は等しく彼の中等室へ流れ入つた。

長田志願兵は流石に面はゆくなつて、

『どうも人聞きの惡い、此の三太夫は臆面なしさらけ出すから叶はん、彼方へ行こう』



と、一歩踏み出して、『時に尾澤、貴樣今日は家へ行くか？』

『うむ、一ッ思ひ切つて冒險をやつて見やうかと思ふてな』、

『やるべしさ、偶にはやつて見るんだ、二時間もあつたら着くだらう、「鷹の巢」か？』

『うむ、下りてから一寸小半里も歩くんだ、考へると臆劫にもなるが、餘り天氣は好し、八時半の門限だから、終列車で間に合ふと云ふ勘定をして見たんだ』、

『すると、中四五時間は遊べる、結構だ！』

『結構とも』と、二等卒は又も話を引取つて『夫れに天氣は好し、道路は宜し、今日の內汽車に故障があつたらお目にかゝらないや』、と、いと陽氣な呀えた聲を高い天井に反響させて『大變だぜ、それア家へ行こうもんなら、村中顚倒り返るやうな騷ぎだぜ、なんなら電報打つてやると良いや、村中總出て迎へろッて、大きな旗の二三十本も推し立てゝてな、……羨ましいや、俺らア汽車もなし、馬車も無し、家へ行つたら行くばかりでも日が暮れらア、嗅が喜ばうが……と言つて俺未だ嗅は無いから情婦だ

……』

『ハヽア、貴樣に情婦があつて堪るものかい』

『まアよ、情婦が喜ばうと、母親が嬉しがらうと、隊へ歸つて營倉と來た日にア形なしだ、ハヽア』

『貴樣なら些とア營倉に入ると藥になる、末の爲めだ、第一班長が骨休めになるつて喜ぶだらうぜ』、

『ふうん、思召だ、難有ていや、死んてからお禮するよ、ハヽア』、

『ハヽア』、

どや〳〵と、罵り叫喚く群衆の聲に連れて、周章だしげに駈け廻はる下駄の響、停車場は活きて動いた。同時にピューと汽笛が一聲高く〳〵蒼空を劈いて響いた。

先を爭ふて、堤の切れる樣に構内に注ぎ入る人波に推されて、尾澤志願兵が今二尺巾の入口に立つて切符を切らせた時、驛夫が我を睨らんだ目に異樣の光あつて、何がなし不安を囁く顫が總身に浸み渡つた。其の氣持は何とも言へない厭なものであつたので、彼は寧そ止そうかと、とつおいつ思ひ惱んだが、人に推されて足は歩むともなく、何時か身は車室の一隅に腰かけて了つた。



## 其二

『大鰐、々々！』と、威勢能く叫ぶ驛夫の聲が限り無き歡樂の福音を響かして、下車する客が夥だしい中にも、我と同じ服裝のが乘つて居た丈け殘らず降りた樣子で、陽春四月の麗かな日差しに、きら〳〵と反射するボタンの光りは、希望に輝いて、今日一日籠を放たれた兵士等は、今現世ながらの樂園に進み入る氣配。

窓から顏を出して瞬きもなく此の光景を眺めて居た尾澤一年志願兵は、心細い氣掛りな念に胸を突かれた。

『俺れも此場で降りやうかしら！』

之れから十餘里も前きへ、峯を繞り、川を越へ、トンネルを潛つて、遠く此世から隔つた谷の中へ運び去らるゝのは、如何にも思病だ、薄氣味が惡い、若しも向ふへ行つてから、不慮の事が起つたら何う仕やう。暗い霧の中へ閉ぢ込められて晩迄に歸られなかつたら何う仕やう！

『夫れよりか今此處の溫泉場へ降りて、奇麗な湯へ入つて、何處かで一杯やつて、晩迄緩り遊んで、そして門限前に營舍へ歸るとしたら、どんなに呑氣で氣が休めるだらう、あー一層然う仕やうかしら！

併し、此の切符の手前を何うするのだ。折角思ひ立つたものを、此處で降りるとは見下げ果てた意氣地無しぢやないか。此の好天氣だ、『今日の中若し汽車に故障が起つたらお目にかゝらないや。』加之、八時半と云ふ門限が此後何時あるか知れたものぢやない、斯んな日に行かなくつて將た何れの日をか期せんや。男子一旦思ひ立つたことを仕遂げずに、そんな薄志弱行で何うするか、なに、こんな大丈夫な汽車だもの、默つて外の景色を眺めて居る内に着くんだ。併し、せめて此次の停車場邊りだと難有いんだが……』。

驛鈴消魂ましく耳元に響いて心臓はギクリとした。

『や發車か。此ア堪らん、飛び下りやうか、や動いたぞ、そら一尺！二尺！あー叶はん、モウ仕方がない、糞ッ何うなとやれ〳〵、儘よ乘りかけた舟だ、やれ〳〵!!!





列車は早く動き出して、一瞬の容赦なく、平川の流れ白く泡を吹く岸に沿ふて、兩側に折り重つた山脈の間を透り透つて潺々として一瀉千里の勢物凄く進んだ。やがて碇ヶ關を過ぎ、大館を越しては、刻一刻家郷の風物が幻を遮つて、吹き送る薫風我家の氣を匂はせる。モウ心配も懸念も全く拭ひ去られて、父母の慈眼、弟妹の笑顔、村人の歡迎など、目のあたり見るばかり。進め〳〵、駈け足！吶喊！あー汽車が間緩い、彼の山の下だ、進め〳〵、百五十日間夢に幻に絶間なく思ひ浮べた我家、門前の細流、黒犬、三毛猫、さア來た〳〵』

## 其三

『アッ兄さんが來たよ！兄さんが〳〵、お母さん兄さんがよ、來たよ〳〵、お母さんてば、早くよ〳〵、ワアッ』と、飛び付いた弟を、一年志願兵、尾澤雄一は、ひしとばかり抱きゞめて、兩の手に高く差し上げると、抑へがたく涙は目に一杯になる、弟も涙を頬に滴らして、留め度もなく涎迄が垂れる。

聲を聞き付けて、戸障子の開く音消魂ましく、母や妹が顔を出す、裏から納屋か

ら、下女や作男共が仕事の手を止めて駈け出る、犬は尾を振つて跳ね上がる、鶏が鳴く、馬は嘶く中に、暫しは夢見る樣に氣が遠くなる。

天から人が降つたやうな騒ぎ、まア〳〵とばかり、人々の顏は春の色に萠えて目に喜びの光りが陽炎をゆらがした。

海に川に遠い山在の山地。何にも魚が無いから、鶏を割け、卵を搜がせ、葱を掘れ、酒を倉から出せ、何はともあれ、村の者共を招べと、春風春水一時に來つて、屋内には大酒宴が始まつた、來る者も〳〵唯だ口を開いてまアまアとばかりに、やれ〳〵お目出度い〳〵。

滿堂に佳氣漲つて、喜びの歌は門外に溢れた。心配、懸念、恐、憂などの微塵だも動かない。

## 其四

初春の高い日も餘程傾いた。でも氣掛りなは、寐ても覺めても醉ふても他いても、暫し念頭を離れない時間である。總身溯え立つばかり酒精の氣を帶びて居ながら、



視線亂れず屹と目を柱時計に据へると、未だ漸う三時。家人等も、一と仕切り、極度迄昇つた夢中な喜びの熱が稍や覺めて、等しく時計へ目を注いだ。で、餘計なことなから、人々停車場へ走らせて、弘前直行列車の時間を委細に聞取らせた。其者が歸つての注信に、昨日から雪解の出水が多いので、今日は線路に故障が出來たから、時間が定規通りには行かないと。

『えーッ』とばかり、敵軍暗に間道を渡つて我が糧道を絶てり。

さア大變！全身に充滿した活潑々地の酒精も愕然として一時活動を失つて了つた。世にも不安なる色が眉を掠め來つては、芳醇佳味喉を下らず、歡語笑話耳に入らず、唯だ太息のみ續々として口を衝いて出づる。

偶と、顏を擧げると、母が容易ならぬ心配の色を浮べて我を凝視めて居るので、ハッとして流石に我が身の意氣地なきを恥ち、親弟妹の心配を慮つて、强いて元氣を付けて杯を手には取つたが、口を付ける氣も仕ない、自分の聲は自分の物でないやうに聞こへ、心臟の鼓動は早鐘の如く耳を震はして、人々の話聲は異樣に冴へて響く。

モウ坐つて居る空はないので、突然と起上つた。一座の人々は其の唐突な擧動に怪みの目を睜つた。

『モウ時間だから歸る』と言つた時には、村人共一同、流石兵隊さんなるものゝ動作の活潑なるに魂消たのである。

あー惜しき別れ！　傾けりと雖ども晝夜平分時の春の日影は未だ高いのである。會飲談笑の樂は之れからなのである、日暮れて燭を秉つて再び催す處に眞の味があるのだ。未だ早い、餘りに呆氣ない、物足らないと、口々に言つては見たものゝ、併し冠婚葬祭の大儀に處して猶ほ甚だしく不規律無茶苦茶な村人と雖ども、我が志願兵が戴ける黄色い線入りの帽子と腰に帶べる短かい劍とを見ては、強いて引止める氣にもなれず、さらばとばかり、一同は醉歩を蹣跚と停車場迄見送ることになつた。

扨て定規の時間になつたが、列車は來ない、一寸に來さうもない、尾澤志願兵は酒の氣も何處へやら、胸が烈しく動悸するばかり、空しく時計を睨んでむら〳〵と急き立つる氣をぢッと抑へやうとして居ると、此の胸中を察せずに、發車の後れるを良い



ことにして、腰の周邊に付き纏ふ弟妹の物面白ろさうな顏は、いとゞ腸に徹へる。其間、見送りの連中は、高聲に罵り騷いで汽車の不都合を囂々する。

嗚呼我れ過てり！と、後悔臍を嚙むの思も今は無益なり、定規の時間を過ぐること二十分餘になるが、列車は來ない。驛夫に問ふと、何時來るか解らないと。嗚呼困つた、十餘里の路程を一搏に翔ける鵞鳥の翼もがなと、悵然太息した其の瞬間に、急に動搖めく人音、ハッと目を擧げると、

『來た〳〵向ふに見えた！』と云ふ叫聲、正さに之れ空漠萬里の沙原に綠蔭を見出した思、屹と姿勢を直して一歩を轉ずる刹那、一聲の汽笛が朗かに山谷に徹して響いた。

我れにもあらず、『神よ！』と念じて、胸を撫て下ろして、慈母の懷に入るが如く、慾も得も忘れて、安心々々と心に繰り返して、引き入れられるやうに車室に入つた。

あー安心した、此の車室内に寢て居る中に、二時間も經てば弘前々々と驛夫の聲が掛るのだ。夫れに時間は未だ十分だ、弘前へ降りて直ぐと歸營仕なくとも、町で一遊び飲み直せる。あー嬉しい、難有い、生れて以來の氣持だ、此の汽車は弘前へ行くの

だ、俺れは此の汽車に乗つて居るのだ、だから俺れは弘前へ行くのだ、之ア巧い、三段論法で行くと、

此の汽車に乗れる者は私前へ行く
我は此汽車に乗れる者なり、
故に我は弘前へ行く。

と、之れ丈け正確に保證されて居るのだもの、此の位大丈夫な事がない。此の汽車へ乗れる者と云ふ媒語が巧い、また、我が事足るか。

眞から實の入つた溢れる笑を向けて、見送りの村人や、弟妹等に士官氣取りのスタエルを答禮して、揚々として車室内に大巾を取つて坐り込んだ。

山谷に反響して、緩い勾配を下り走る汽車の音は、實に勇ましい。

『砲聲轟々百雷怒』と微吟して見た。良い氣持だ、滿足な日だ。見渡すと、室内の乗客は僅かに七人、丁度向合つたのは、商家の番頭と見える廿三四の、烏打帽を前のめりに被つて半長靴を穿いて、稜羅紗の前掛けをめたハイカラ作りの若者、





傍に置いた葡萄酒の壜を一寸目の高さに透かして見て、さて此方を見返つて愛相能く、

『何うです、失禮ですが乗り合はせたを御縁に一ッお嫌でなくば……』とコップを差出した氣輕い調子、尾澤志願兵は善き話相手と思つて、

『いや、難有う、今日は朝から飲んだので實は大に參つたですよ、折角ですが……』

と辭して見たが、彼方は夫れでもと強いて握らせたコップへなみ〳〵と注ぎながら、

『今日は休日でございますか、お宅へでもお出になつた御容子に見受けましたが？』

『いや演習後の慰勞休暇なんて、八時半迄の門限だから一寸冒險をやつて見たのだが、汽車が來ないには閉口仕ましたよ』

大きにね、一分でも後れるとなると氣が急かれましてね、併し、八時半迄なら、此先き一二ヶ所位故障があつたにしろ大丈夫で御座います、』

『いや此先き又そんな事があつて堪るもんですか、……併し何かそんな模樣がありさうですか？』

『え、確とは存じませんが、此の前の停車場で、車掌の話に、今日は三四個所壞れて

居るから、此の列車が無事に青森迄行けるか？と云ふので、私も弘前迄の處丈け無事に行つて呉れゝば良いと思つて居るので御ざいます、』

『えッ、此奴叶はん、此邊餘程厚雪だつたと見えて、今が最中解けがゝりだから叶はんて、どうも怪しからん！』

一朶の愁雲端なく車窓を籠めて、天地又もや暗黒ならんとす。

『又待たせられて堪るものか、まさか其樣な……併し、若しも此先きそんな事があつたら全く往生だ！』と、不安の念むら〳〵と起る。

一驛二驛を何事もなく通過して、日は大に傾いた。兩側の峰々は早や晩景色を帶んで來た。第三驛に至つて、平生は三分停留の處へ、十分餘も停車して、其間驛夫等の行き來う狀が何かなし、覺束ない或る意味を囁くのてある。乘客一同も漸く不安を感じて、申合はせたやうに窓から顏を出して眺めやつた。若しや〳〵と暗に恐を爲して居た尾澤志願兵は、此の動搖めきに唯事ならず、胸に錐を刺された思ゝそつと、惡寒が全身を顫はした。跳ね上げられる樣に起つて、窓から顏を出すと、雲行如何にも





怪しく、口々に罵る乘客の聲。

『何うしたんだらう、又待たせられるのかい？』

『何か始まつたかね？』

『何んても此の先きのトンネルが何うかしたと云ふんだよ』

トンネルが何うかした！　此の一語に、我が志願兵は殆んど氣を喪つて、起ちかけた席へ尻餅を突いた。

敵軍　鴨　越を逆落しに我が背後へ火を掛けた！　吁我命窮まれり！

一人便所へ行つた男が歸つて來て、今驛夫の語る處では、汽車が此處て摺り違ふ事になつて、向ふから來るのを待ち合はせて居るのだと云ふ。

『なんだ馬鹿々〳〵しい、いかい心配した。今に來るだらう、一服喫んて居る内にピューと來るやつさ、トンネルがどうしたこうしたなどゝ人を騷がせらア』頑丈な白髮頭の、親方と呼ばるべき風體の爺が悠々と煙管を取り出す。

尾澤志願兵、僅かに胸を撫て下ろして、氣を沈めやうと目を瞑つて見たが、矢張り

落付けない、起つても坐つても安からず。

併し向ふから來る列車を待合せるのなら、大した待たせられることもなからう、モウ決して慾は云はないから、どうにかして門限迄の間に合ひさへすれば外に望はない、オー神よ！

時計を出して見た。正さに五時二十分、えーと一時間かゝつて、六時半には弘前へ着かれるに。吁情無い、向ふへ着いてから營門迄一時間と見て、差引き、餘す所は一時間、どうか此の一時間内に向ふの列車が來て呉れると良いが、……いや、そんなに待たせられて堪るものか、直きビューと來る奴さ、一寐入りやらうか。彼は腰掛臺に溢れる軀を横になつて、帽子で顔を被ふた、併し却々眠れるのではない。

『何うしたんでせう弘前へ着いたら暗くなるわ、七時迄に歸れないと、妾何うする事もならないのよ、叔母さんに叱かられるわ。』

『だつてお前、汽車が後れたんぢや仕方がなからうぢやないか』

『でも一番で歸ることにして有るんてすもの、あー何う仕やう、』十五六の小娘の聲。



『ほんとうに馬鹿々々しいや、汽車で待たせられるのア一番氣が揉めるんだ、遠離れも出來ないしと言つて、何時來ると云ふ當もなしか、厄介だ！』之は三十近い哥いの聲。

尾澤志願兵却々眠れるのではない、ガバと跳ね起きた。

山際の土地に、夕の空は漸う霞籠めて、向ふの峰に夕陽が眞紅に差して居るが、後ろの峰に遮ぎられて停車場から日は見えない。峰々の凹んだ處は、早やほの暗く夜の色を宿して、冷々する風が頰を撫て行く。近傍の茅屋根からは炊煙綏るやかに立上り、遙か向ふの並木路を行く馬子の追分節手に取る樣に聞こえて、未だ淺き春の晩景色は、憂ある目に寂しさいとゞ切なるものである。

窓から顔を出して居た者も、漸く退屈を加へて、出る者は出、入る者は入り、人は皆な飢えたる色を帶んで、間の抜けた顔ばかり。驛夫等は構内の柱に凭れて、懶げに欠伸を齒んで居る。

又時計を出して見た志願兵は、モウ氣が氣てない。今二十分の内に進行が始まらな

ければ門限に間に合はない勘定だ。刻一刻天地は暗さを増して向ふの峰の紅い日差しも消え、百歩の外は早や不明了の暮色、我が志願兵の顔も今は蒼然菜の如くなつた、丁度車室にパッとランプが點もされて、いと〻人の顔を青く照らした。

尾澤志願兵今は意地も拔け力も拔け、グタリ身を車室の隅に倚りかけて、心配も憂も疲れ果てゝ、波の間に〳〵渦捲かるゝ泡の如く魂は次第に消えて行く氣持。茲に彼は、五ヶ月前入營の當日から今日に至る迄の、憂い、つらかつた事に出會つた數々を、一瞬の間に腦裏に呼び起こして、果ては今朝營門を出て來る時に、歩哨の目差しが何か知らず自分を射萎むる程鋭どかつたこと、弘前停車場で出會した二人の同班兵のこと、堪らなくなつて寧そ降りやうかとまで思ひ詰めた大鰐停車場のことから、今の今惜しき別れを告げて來た我が家のことなど、歴々と掌を指すばかりに思ひ浮べたが、扨てと、今の我が身、――何時發車とも知れぬ汽車の中に、途方に暮れて、泣くにも泣かれぬ憐れ果敢ない身の上に考へ至ると、之等目の前にちら付いて居た幻影は、忽然千萬里彼方の空に消え去つて、見渡す限りは漠々たる黑雲天の際迄蔽ふた海洋の



離れ小島に取り殘こされて、我身は刻一刻影薄れ行く思。吁、心細い、淺ましい、第一に情ない、殘念だ！

同時に、むら〳〵と胸に込み上げる悔悟の念、何ぜ俺れは我家へ來たらう！隊て許さないものを良い氣になつて來た許りて飛んだことになつて了つた。吁、口惜しい、歸つたら營倉だ、來なければ良かつたに、吁殘念だ、臍を嚙んでも及ばない。えー糞ッ、斯なつたらモッ破れかぶれだ、十圓かゝつても二十圓かゝつても良い、何處かの醫者に急病の診斷書を書かせやう、若し發覺して二重に罰せられやうと、今の所之れが唯一の手段だ、と考へ至つて我ながら急に恐ろしさが一杯になり、あゝ併し何うにかして、門限迄に無事て歸りたいものだ、と胸一杯の溜息を唸るやうに吐いた。

どや〳〵と構内遽かに色めき立つた、尾澤志願兵は惡夢から覺まされたやうに、突つと目を見開いて起上つた。見ると驛夫等の往來急がはしく、何か知らず一道の光明胸に閃めき入る思ひ、同時に隣室の窓から顔を出して居た男の聲で、

『さアメめた、今度大丈夫來たんだよ、今電報が掛かつたんだッさ、やれ〳〵待遠し

い事であつた、之れて漸う助かつたと云ふもんだ、』

然り、助かつたもんだ！と、我が志願兵の目は生々と光を放つた。彼は先づ帽を直した、手袋を直した、夫れから腰の邊を直した、そしてポケットを探つて時計を出して見た、正に六時半。

此奴ア大變！さア一瞬を爭ふ場合だ、危機一髮だ、一時間の内に弘前へ着かなくちや、萬事休すだ！　だが俺れの時計は今朝十分か遠つて居たつけ、進んで居たつけか、否や後れて居たんぢやなかつたかしら、……此驛の時計は何うなつて居るかな？

彼は戸を排して構内へ立ち出てた、人々の行きこう樣あはたゞしい中を、姿勢を取つて掛時計の下へ進み寄つた、見ると之又六時半！此奴訝しいな、俺れのと丁度合て居るとは變だ、何方か嘘てなけりやならん譯だが、……と首を傾けた途端肺腑に浸み入るばかり冴へた汽笛の聲と共に、瀧々と軋り來る列車の響。ハッと思ふと、追つかけられてもしたやうに、周章だしく我が車室に逃げ歸つて彼は後生大事と扉を手て抑へた――、心胸の鼓動は波瀾の如く。



向ふから來た列車は、我れのと相並んて停まつたが、双方の機關車は互に相應じて鋭く鳴り合ふばかり、我が列車は動かない、一刻千秋の思。

『何を悶々々して居るんだらう後くなるに！』と口走らざるを得ないのてあつた。

日は暮れ果てゝ、十歩の外は分明ならず、夜氣肌を刺すばかり、腹は減る、目は冴える、煙草は吸い盡くして口は苦がい。

バタン〳〵と、驛夫等が車室の戸を閉づる音、發ますよと警むる聲、ハッと思ふと、我れ知らず立ち上がる。ピーと、切るやうな車掌の呼笛と共に、ズシリ列車は動いて、フラリ身は支へ度もなく尻餅を突く。

## 其五

ガタ〳〵ゴド〳〵と、列車は勢能く進む、路傍の林や人家や、只ぼんやりと暗中に巨影を立たせて、處々に燈火明滅、汽關車から散る火の子はパラ〳〵と飛び去ると極めて早い、進行は今全速力であるらしい。一驛二驛三驛無事に過ぎて、近く電氣の光り宙を照らした市街の大きな停車場へ、列車はガタリ停まると、先頭第一

『弘前！』

と叫んで戸を跳ねのけて躍り出たのは、我が一年志願兵尾澤雄一であつた。

切符を投げるやうに渡して、構内を出ると、向ふ一面、ホンノリ電氣の光り宙に映つて、天色水の如く青く輝いた不夜城の弘前を夢かとばかり、我が志願兵は氣拔けしたやうに暫し立留まつて、又氣が付いて時計を出して見た。

正さに〳〵七時半を過ぎる事八分餘である。

『一時間有る！　占めた、難有い！』

時計をポケットへ捩ぢ込んだまゝ、彼は眞直らに駈け出した、兩側に幾十輛と控へた俥も目に入らぬげに。

市街迄の停車場路三丁餘りを一氣に走せて、ほッと息を吐いて、苦しい胸を抑へて、下を見詰めたさり、今度は、石とも云はず、馬糞とも云はず、電信柱に肩を擦り、ストライキ節の半纏仲間を突き除け、電燈眞昼の如き大通を駈け進んで、市中を縱斷する川の橋をとゝろと踏み越へ、此處から間道を横に、狹い小路へと突き入つた。



急に暗くなつて、往來に人影もないので、偶と氣が付いて顏を上げて見廻はした。高い建物の板圍に兩側を塞がれた、狹い眞暗な通路は、森として我が吐く息は恐ろしく響を反して居る。此處迄來る途中、唯の一人も兵士に出會はなかつたと始めて氣が付いた時、彼は總身水を浴びせられた樣に、わく〳〵する胸を兩手に堅く占め付けた。

『アー後い〳〵、モウ後れた、誰れも隊の奴が歩るいて居るものはない、モウ時間が後れた、何う仕やう！』

慄と寒氣がして、軀は萎んで了つた。足は鉛の樣に重い、一歩も運ぶ氣が仕ない。

『モウ仕方がない、最後の手段、何處かの醫者を……』と、グタリ後の建物へ倚りかゝつた刹那、風に送られて一節軍歌の調子。

ふつと耳を立てたが、夫れきり後が繼がない。

『兵隊かしら？　今頃迄醉ぱらつて放歌して歩るいてるのか？　何うも子供の聲ではなかつたやうだ、未だ時間が間に合ふのか、……然うだ〳〵、兎に角行く處迄行つて見や

う、』

今や最後の一撃、必死の勇を鼓して、韋太天に駈け出した。目に遮ぎるなく、耳に聞くなく、歩き馴れた小路の暗がりを幾曲りかして、今漸う營舍に程近い胸を突くやうな急勾配の坂を息も絶え〳〵に登り切つて、ふと頭を擧げると、目の前を通る二人の兵士、オヤと思ふと、

『オ、長田！』とばかり、今朝大鰐停車場迄同じ列車に乘つて行つた、彼の同班同室の志願兵の袖へ攫み付いて、

『まゝゝだ、時……時間が……？』と、僅かに語を爲した、此世の人の聲とも思へぬ不調子な發音を、彼方は吹き出して、

『オイ確かりして呉れ、まだ二十分有るよ。』

『ウー』と言つたきり、我が主人公は生體もなく倒れかゝつたのを、危く二人の手に抱き止められたのであつた。』

（完）



# ぬたくり

◎滋養物の中毒。　『何うした……胃が病いぢやない、お前のは滋養物の中氣だ。肉や、生魚の樣なものばかり食ふから、體軀が軟かくなつて了つた。滋養物〳〵と言つて贅澤食ひをした罰で、油氣や灰分が足らない、貧血して顏が蒼白くなつた、副食物ばかり餘計に食ふて、米の飯を碌に食はない。小麥で製つたパンを食ふて牛乳ばかりガブ〳〵飲むから、身體が、グチャ〳〵に膿んで了つた。根氣が無く、些とも遠大な思慮が出ない。唯だ、氣ばかり敏くなつて、一寸物を見付けたり、隙へ付け入る事ばかり惡達者になつて、先潜りは上手だが、お前は眞暗だ。

日本人は米を食はなくては駄目だ。毛唐の國で毛唐の體質に合ふ療治を其儘に、細

長い島國へ直譯して、體質の全く異つた日本人へ候めた處で追付く譯のものぢやない。日本人は穀食人種だから、副食物を食ふ腹があつたら、米の飯を食ふだね……なに癒るとも〳〵。第一に血が足らないから鹽が要る、些と鹽の辛い干物や、鹽鮭の樣なもの、佃煮や福神漬、夫れから油氣が足らないから、肉や魚の脂肪は不可い、胡麻の油が一等だ。干物や、鹽物を油揚げにして、大根卸ろして食ふと結構だ。胃が惡るいと言つて、硬いものは不可い、油は不可い、鹽が不可いと言つては何も食ふものが無くなつて木乃伊になつて了ふ。……良いとも〳〵、甘いもの結構――つぶし餡のしるこなどは結構だ。餅と云ふものは人間の身體へは一番の藥だ。酒も、麥酒、葡萄酒など、毛唐のものは凡て不可い、日本酒――正宗の上等熱燗と云ふやつは少しは用ゐて結構だ。蕎麥も宜い、うどんは些と鹽辛くしてやると宜い。それから筍の硬い奴な、福神漬も砂利の入つた齒が〳〵りのあるやつを、ザリ〳〵食つたから日本の兵隊が強かつたのだ。ね、解つたか！　日本人は穀食に限るのだ、毛唐の眞似して、足がぶらぶら浮く樣な高い腰掛けて、洋食の、ソップの、牛乳の、コヒーのと騷ぐから、身體が



べだ〳〵になつて了ふわ。』

白髮頭を振り〳〵說く意氣は素晴らしいもので、內幸町の冒腸病院などは、鼻息で飛ばされそうだ。醫學者仲間では此の說を一笑に付して顧みない樣子。だが、斯んな說法を聞かされては患者たるもの、何が何やら、終には、自分勝手に好きなものを食ふて、勝手に振り舞ふ外に仕方があるまい。だが、其の滋養物の中毒なりと喝破する處は面白い、日本人は穀食で澤山だと說く處が面白い、副食物を贅澤食ひする腹があつたら米の飯を食へ、毛唐の奴を丸呑みに輸入した療法が何になるかと罵倒する所は生きて居る。之を科學的に見ては、頑迷度しがたいといふべしてあらう。だが、之を一種の信仰と見ては、牢乎として拔きがたい力がある。其の鄕土的な、從つて自然的な、復古的な、直譯的の小智を眞向から罵る所などは、之れ直ちに今日の似而非な日本文明を摘發したものと思はれて頗る痛快なものである。人間の小智は、一切の方面に常に滋養物の中毒を釀しつゝあるではないか。今日の文明開化は、貪者弱者をして、到底世間と平行し得ざるを思ふて、我れと縊れしむる暴壓者である。其の狀態は

丁度、牛乳、卵、肉、鳥、魚、と醫者に言ひ付けられた滋養物を攝り得ない貧病者が、到底及びがたいと思ふと、一層に氣迄病ましめて、二重に病勢を進めるやうなものである。此の場合に於ける、滋養物の中毒なる語は一種の新福音である。敢て之を身體の疾病に限らず、精神上、社會全般に亘つての新福音として省みるに足るものである。

◎腰掛け主義。　腰掛け主義とは、一にも西洋二にも文明と人眞似する、腰掛け的、一時的の文明主義なり。手近の一例は洋食の宴會なり。細長く食卓に向ひ合ひて、際と際とは電話の設けなければ顏は勿論見えず話もならず、我が並みに座せるは、左右兩名づゝ顏が見え話が出來る位、向側とて、五六人の顏しか見えず、食卓へギッスリと軀が喰つ付く樣に椅子を引き付け、左右の人とは、肘が突き合ひてナイフや、フォークを持つ手も戰々兢々腫物に障る樣に、成るべくは口も利かず、ボーイの早く〳〵と迫り立てる目付きをせめてものお愛相に、酒はグーグーと、肴はサッサと、行儀能く、食はんが爲めに食ひて、實は幾品出で、何んな味のものが出るにや、一向知れね



ば、大急ぎで、頰張り、丸ごと嚥み下せる脂濃き御馳走が、三皿位て腹が一杯になり、次に出るものは、美味そうであらうと食ふ氣もなく、ボーイが一々皿を運ぶ樣の煩はしく氣に障り、暢びりと、陽氣な所もなく、君士は嗟來の食を……と言つた唐土の聖人がたとへ今此處に見る目眞さしく、人を厄介扱ひに、人間は生きんが爲めに食ふのであると、直譯的に、氣に落ち付きを得させまい、長飲みさせまい、早くコーヒーの一杯を別席で當てがつて、夫れでお茶を濁ごして、やがては散會させやうと云ふ、何處迄も腰掛け的な、不屈千萬な、黑い洋服姿の野郎の熊の樣な手て、大きな德利を客の肩から差出して、ドブ〳〵と注いで廻る殺風景な御馳走なり。

何う見ても、何處から考へても、洋食は腰掛け主義なり、之を料理店の側より見れば、客を踏み付けたる足掛け主義なり、之を客の方から經驗すれば、遂いには、フッと起ち上つて、プイと出て、サッサと歸つて了はざるべからざる、讀んて字の如く、急せと生きんが爲めに側目も振らず食ふべき食物なり、之を料理と云ふは非なり、何處迄も食なり、醉拂ひ的御馳走に非ずして、追つ拂ひ的食物なり。天下豈にあんな窮

ぬたくり

屈なる狹き苦しき宴會あらんや。

之を要するに、洋食の宴會は、飲む暇なく食はしめ、最後の冷めたい品を盛りたる一皿に血を寒からしめて、サッサと席を離れざるを得ざらしむる、宴して亂するなからしむべき君子的宴會なり。人間飽食すれば、將た脂濃いものを食へば、氣が重く、眠く、欠伸が出て、茶ばかり欲しくなりて、終には、腰かけて居るが苦しくなりて、逃げ出ずべき、極めて冷靜なる生理的宴會なり。ヒッ〳〵と隣りの人と語りて、むしや〳〵と食ふべき宴會なり、三十分にして飲食を終るべき、時間の尤も經濟なる宴會なり。殺風景を通り越して、冷酷なる宴會なり。要するに文明が宴會なるものを厄介扱ひにする證據なり、發起人が勘定を過らざるべき宴會なり。然れども之れ人の罪にあらず、文明の特質なり、文明とは冷かなる腰掛け屋なり、儀式でお茶を濁ごす勘定高き君士人なり。

◎趣味の變移。　趣味の變移は多くは向上にあらずして墮落なり、境遇化なり俗化なり。單純より複雜に入るは進步向上なりと云ふと雖も、初一の趣味を思ひ切つて極度



迄發展し得ずに、周圍の事情と、我が見聞とに依りて、別種の趣味に移り行き、やがては、第二次の趣味をも存分發展し得ざるに、又もや第三次第四次に入る。回想すれば、初一の趣味が如何にして我が心を去れるか、茫として尋ねがたく、彼の初一清新の趣味を時と所とを得せしめて徹底せしめたらんには、其處に何等か得る所ありしならんにと、昔偲ばしむる例は何人にも有り勝ちの事なるべし。

之を例せんか、我れ少にして、友と喜遊せるの日、俗念なく野心なく、實に白雲の悠く行くが如く、鳥の長閉かに囀るが如く、花の咲けるが如く、水の流るゝが如く、淡くして而かも弱りなく樂しき趣味を抱けり。然れども稍々長じては、人間の間に自動と被動との別を認め、自動して人の上に出てざれば社會に生存するの價値なきが如く外圍より强いられて、人生には權謀術數の常に行はれ、正直とはやがて馬鹿の異名なりと感ずるに至つて、我は昨の天眞爛熳たる趣味の中に安んずる能はず、何時の間にか人を凌ぎ、人を壓し、術數を構へて以て豪なりとするの趣味に入れり。然れども、社會に觸るゝ事多きに從ひ、人生は共同なり、人生の意義は單獨にあらずして社交の

内にのみ存ずべきを知るに至りて、趣味は又一變せり。我は甚だ臆病になれり、氣兼ねする事多くなれり、物事は凡て程々に度合を見計らつて差別を立てざるべからず、禮儀は重んぜざるべからずと云ふに至りて、其の手加減に忙殺され、一擧一動自意識もて自己を批判するに至り、自我は全く煙滅して又成長するに暇あらざるが如くに思はるゝに至れり。其間、少時に在りては、服裝も振りも構はず、帽子を被ぶり、折目正しき羽織袴を着、行儀能くして道行くなどは、如何にも氣辛らく、青年等が腐つても紋付きの羽織を着、紙よりにても、羽織紐は必ず無かるべからざるものゝ如く、變挺な帽子を行儀能く被ぶりて、肩を怒らして歩るくなど、馬鹿氣て見えたるが、やがて、我も其の年頃になりては、外圍の壓迫に堪へず、自然に其の樣なる眞似して、矢張り夫れが一番良いものに思はれ、追々には、學校生活を脱して嘗ては想像も及ばざりし家庭を造り、先輩を訪問し、知らぬ人とも交りを求め、酒樓にも上り、嘗ては賤し低しと思へる音色も、人生に大切なるものゝ樣に、左程氣にも障へず、圭角が取れたとても云ふのか、何事にも慷慨するは馬鹿の樣に、浮世は凡て斯うしたものと寛大



になつたのか、墮落したのか分らなくなれり、其間凡ての方面に於ける趣味は、中心の變移と共に變じ行きて、前きに全く度外視し、若くは嫌忌し憎惡せるもの迄が、却て結構なことの樣に思はれ、人間は風向き次第で變ずるもの、末は如何になり行くやら考へも及ばざるに至れり。然れども少時初一の中心趣味のみは何時迄も棄てがたく心に殘りて、折々には夢の如く思ひ浮べられ、譯もなく憧がるゝ氣のせらるゝなり、何故に彼の初一の感情と趣味とを十分に維持發展せしめざりしかゞ、恨めしく悔やしく、第二次三次の變移は寧ろ墮落の樣思はるゝなり。かくて今日の雜駁なる、良い加減なる程々なる趣味は、何等の統一もなく歸一の見込みもなく、之れ一ッ我を忘れ、人を忘れて三味に入るべき趣味あるものなく、體裁能くば多方面と云ふも、實は無一物の、飽食の苦みにも似たる趣味の、進歩にもあらず向上にもあらず、眞しく之れ墮落なり、今に此の混沌が、或るものを中心として歸一すべきかは、我が混亂せる感情の、若し能く宗教的信仰に歸一すべきかに即せる問題なり。かゝる趣味傾向の變移を具體にせば、新らしき小説となるべし、併し、其は藤村氏の破戒よりも一層讀むに骨

の折れる小説なるべし。

# 傘賣り（歌舞伎座の助六）

チョン〳〵と柝が鳴る、幕は横に引き拂はれる。見ると、舞臺は吉原仲の町、遊女屋前の光景、入口の暖簾には三浦屋と染め抜かれ、格子の中には簾を垂れた中に蠟燭の火が三つ四つほの見えて、白い女の顔がズラリ居並んだ氣配如何にも嬌めかしい。此の時代には、張り店に簾を掛けて屋たのか、なる程、素顔で格子の間から赤煙管を差出すよりは餘程上品だ、實物とは全く異つて見せる寫眞を飾り立てるよりはズッと氣が利いたやり口で、當時の花魁は、今の藝妓よりは餘程權式のあつたもの、有るか



無しかに簾の中に朧ろげに見える所が價値て、新體詩で恐れた朧化の勞力も、此處へはすつくり俟まつて居るから妙だなどゝ獨り極めの名論を案じて居ると、口上方が出て、河東節の連中が内に扣へて居りまずると演べられて、少々周章てたが、どうせ女が居るのだから見た氣持は同じことだと旗色を立て直して汗を拭いて居る。

其處へ兩花道から、六つと九つ位の小供の金棒引きが出て來る、上手と下手から大人の金棒引が二人出て來て今日も大入りて結構だ、後で緩くり一杯飲むべいよと交代りに入つて行く。今度は仕出し屋が盤臺を擔いで通る、按摩が杖を振つて荒ばれる、淺草の鐘が鳴る。なる程色街だなと思はせる。そこて、今度は何が出て來るだらう、何が出たら此のなまめかしい光景に一番適するだらうと、夢の樣な事を考へて居ると、いよ、待つてましたと、活眼な大向ふから奇聲を發する。ハッと氣が付くと、今花道から徐々と乘り出したのは、花魁の道中、眞先きには提灯持、次には御本尊の太夫、髮には鼈甲の簪を二十本も差し、帶を前結びに、夜具の樣に裾綿の厚い五枚重ねの裝束て、一尺も高い黑塗下駄を内八文字に踏んて若者の肩へ左手を摺りながら、一人

の若者には後から大きな傘を差させて、牛よりも緩い歩き方をする。何んても、今夜は大雨が降つて、氣候が急に大寒時の樣に寒くなつたものと見える、あの歩き振りて察すると、仲の町の泥濘は、砲兵工廠の前以上なのらしい。かくて、此の花魁は、前に提灯持、後に傘持、左に杖柱と三人の若者を從へた外に猶ほ後ろに花簪赤衣裝の小娘二人、二十前後の女二人、四十女一人と　大の男二人の行列を引いて居る、之れは、かむろの、新造の、遣り手婆のと云ふのであらう。何にせよ素晴しい妖艶な魔物て、數々見たら嘸ぞ嫌らしい、馬鹿氣たものであらうが、錦繪を其儘に生かして見せられるのだから、第一に好奇心が動かされる。金に飽かして贅澤に女を玩弄する者の爲めには、女の方でも之れ丈けに馬鹿げた風俗をしなくては、とんと味が無いのであらう、どう見ても、あれは武陵桃源の仙女なのだ。

斯んな魔物の行列が四組と云ふもの出て來て、舞臺正面に進んで三浦屋の格子店の外に、大道に据へられた臺に腰かける。そして變になまめかしい、粘氣のある語調て、櫻は滿開て好い景色だと、四人が順に話を送つて天井を見上げる、なる程、頭の上に



は枯木の小枝に薄赤い紙片を貼り付けたものがぶら下つて居る、汚ない櫻だ。錦繪て見る仲の町夜櫻の景色程に美しい感が起らぬ、第一、ぼんぼりが立つて居ないのは氣が濟まぬ、夫れに場所の幅も奥行もないから窮屈だ、本郷座式にパノラマ仕立てやつたら、もつと〳〵引立つて見えるだらうにと殘念だ。

そこへ、又一組花道から花魁の行列が出て來た。之は身粧や、其他總體に、前の四組よりは大袈裟に威張つたもので、十一人の供を連れて居る。花道の端迄來ると、此の花魁、身を妙にくねつて、捲舌の醉拂い口調に呼へた聲を擧げ、妾こそは今吉原て一と言はるゝ三浦屋の揚卷、酒は五斗兵衛を凌ぎ、俠は日本一の男伊達、花川戸の助六さを情夫に持つて居ると叫んだ。大きな赭熊髪へ揚卷結の金糸を掛け、背に七五三飾りを背負つて厚綿の五枚襲ねの裾を、あひる式の内八文字振りに進んて、舞臺中央の臺へ腰かける。捌ばいた裾は二尺も地に布く、それが歩く時には自然に疊まれる重寶な仕立方て、西洋婦人服の樣に裾持男が要らぬ所は大した文明なものてある、金襴の衣裳の上に金色の長い毛が、兩の肩から胸から、三尺も長く垂れた容姿は、人間の

顔した獣物と見える。此の獣物、やがて三尺大の銀煙管で煙草を吸ふ、物凄いことである。

處へ花道から又一組の花魁行列が出て來た。之は孝行娘と見えて、白髮白髯の老爺を連れて櫻見物に來たらしい、此の老爺、苦がり切つた惡相者で、八百藏に似て居と云ふ評判。花道に立つて二人は口論する。娘は、向ふに大變奇麗な花魁が居るから、お前さん年に似合ぬ助兵衛根性を起しては困るから、此處から引き返そうと云ふ。老爺は聲を荒らげて、否や大丈夫だ、手前がそんなに氣を揉むなら乃公は此の寶刀で以て彼の五人の獣物共を切つて藥てると言つて目をぎよろりとさせる、見物は手に汗を握ぎる、娘は驚いて、櫻時にそんな血腥いことをするのは、後代に水戸の浪人がする役で、お前さんの樣に白髯では大した見榮えが仕ないからお止しなさいと意見する。老爺はなる程と承知して、ては早く行つて櫻でも見やうと、やがて正面へ進んで花見臺へ腰かける。處が此の白髯爺奴、前の誓言を反古に、いつか謀反を起して隣りの臺に腰かけて居る揚卷にしよつかいをかけ、苦虫噛んだ顔の相好を崩して、妙に口を歪



めて口説きたてたから、此方の金糸の獣奴、ぷッと膨れ面になつて、爪を磨いて見せ、妾は江戸ッ子だ、お前の樣な白髮の人間は嫌だ、妾には助六さんと云ふ情夫があつて、それは〳〵の、細りした、若い、色白の、今江戸一と云はれる男伊達で、お前と比べると、雪と灰だ、ても小汚い、彌やに助兵衛な、年甲斐もない、八百藏が化けた樣ないけ好かない老爺だなと背を向ける。其時老爺は憤となり、毛虫の樣な眉毛をぴく〳〵と動かしていやお前の情夫は助六傘と云ふ、當れば破ける傘賣りだ、近頃は商は無いから、小人窮すれば濫す、毎日〳〵天氣の好い日に限つて、往來の眞中に立はだかつて用もない傘の押賣りをする。買はなければ喧嘩を吹きかけて、人の腰へ手を掛ける、癖の惡い泥棒だと云ふ。揚卷は腹立てゝ、お前の樣な死損いの白髯爺が居ては折角の花見の邪間になるから、さつさと失せあがれと、江戸ッ子式のたんかを切る見物はやい〳〵と大騒ぎ。

『いよ十五代目！』と、大向ふから叫んだものがある、滿場動搖めく。見ると、今花道へかゝつた男がある。生白い顔に紫の鉢巻をして、胸から赤襦袢を見せ、赤裾、

傘賣り

赤裏の意氣な粉裝て細い尺八を背に負ひ、大きな印籠を腰にぶら下げ、蛇の目傘を差して居る。花道の眞中へ來て、此の傘はお品が上等で、持は善くて、お得用で、誠に早や結構な助六傘と申すもので御ざいと言つた樣に、無言で傘を開いて見せ、すぼめて見せ、斜に翳ざして見せ、横に振つて見せ、地へ突いて見せ、はてはクル〳〵廻はして見せ、地の上を引摺つて見せ傘の功能を實地所作て見せた所は天晴れの手際で、彼の、ブーカブカと樂隊と旗て、市中を練り廻る今の廣告法などは之に比べると誠に早やデカダンの極である。

『助六さん今の廣告は？』と、正面に腰かけて居る五人の花魁は聲を揃へて『獨逸式か、夫れとも佛蘭西式かいな？』と問ふ。

『なに、歌舞伎式だい』と、寛濶に舞臺中央へ進んで『今日は幸夜が霽れたから傘を買いねい』と、尻を捲くつて威勢を付ける。花魁共は、妾等には大きな傘が一本づゝあつて、傘持奴迄抱へてあるから、オリーブ色の婦人蝙蝠傘ならなんだけれども……と體よく斷つて、お前さん、今の廣告で嘸ぞ疲勞れたらうから、此處へ腰かけて息を



お入れなと、鶯の樣な聲を揃へて言はれたもんだから、傘賣りの冶け野郎、のろくなつて、涎を垂らしつゝ臺へ腰かける、妓共は可哀相に思つて、まア一服召し上れなと、名々に吸ひ付け烟管を一本づゝ出す。總計二十幾本の朱らうを鷲掴みにしつゝ、傘賣りは、色男は我一人と威張つたものだから、先刻から指を喰へて見て居た彼の白髯老爺は我慢がてきなくつて、やい若けいの、乃公にも其の烟管を一本貸せと云ふ。傘賣りは尻目にかけて、傘を買うと云ふのなら未だしも、吸ひ付けの煙草を貸せとは、人を烟にした、見れば見る程白い野郎だと、傘が賣れない、むしやくしや腹て散々惡口吐いて、白髯爺を侮辱した。爺は怒つて刀を拔こうとしたが、手前の樣な赤襦袢では血が榮えないからと、不相變、苦虫を嚙んだ顔をして居る。

其處へ、朝顔せんべいと云ふ白髯爺の子分が浴衣姿で、三浦屋から出て來て、ぷつ〳〵怒つて、妓が俺れと一所に湯へ入る約束しながら、幾ら待つても來アがらねーて、俺れは危なく湯鎔けになる所だ、畜生太い奴等だ、之から此屋の妓共を湯漬けにして搔つ込むのだと荒れ廻つた果てに傘賣と喧嘩をして、酷い目に會はされる。喧嘩

と云ふ騒ぎで、大勢の捕り方が來る、傘賣りはだんびらを拔いて立向ふ。其の勢に妓共も、髯爺も、捕り方も、恐れて皆な逃げて了ふ。後は傘賣りの一人舞臺になつて、大威張りに威張り散らした果てに、吁、詰らねー、今夜はこんなに晴れても傘が一本賣れず、廣告に骨が折れて存分腹が減つたから、一ッおでんのこんにやくでも食ひに行こうかと、立去らうとすると、一寸お待ち下されと呼び留めるものがある。見ると、地べたに伏した男が居る。明るみへ引摺り出して見ると、青い半天に、青い頭巾を被つて、天秤棒を持つた甘酒賣り。手前は一體何んだ、何んで我を呼び留めた。顔を擧げいと、能く見て吃驚り。

『やゝ兄ぢや人、祐成殿！』

『オー案に違はず、弟時宗であつたか！』と、

世は急に鎌倉時代に逆戻り、花川戸の助六とは世を忍ぶ假りの名。眞は曾我五郎時宗だと云ふ所で、見物一同は無やみに喝采する。我輩素人には何の事か夢に夢見る心地。吉原と鎌倉と何處へ何う繋がつて居るのか、茲は神秘幽玄の別天地、夢幻の境。大天



才の頭から割り出された趣向は、凡庸の心もて測りがたいが、兎に角舞臺に變化あらしめて、窮しては通じて、見物をして、あつと胴忘れさせる奇想天來の此の味遂いに解すべからず。縱横自在に、何等の拘束なく唯だ面白く、賑かに、派手にして行くには夢幻劇位、都合能く無造作なものはないのであるから、今度は一ッ、歌舞伎十八番の主人公をごつちやにして、一芝居を仕組んだら、之は開闢以來の珍劇になり、藝術の絶對價値も立派に事實の上に證明さるゝことだらうと、感嘆の汗を拭きあへず。

手前は近頃は傘の骨も削らずに、夜毎日毎に吉原附近を迂路付いては、人へ喧嘩ばかり吹きかけるとは、不心得極まる、見ろ、私は、お前が稼がないから、此頃は、食ふにも衣るにも、氣の利いた派手な眞似が出來ず、斯んな青熒色の半纏に叺頭巾の見ともない服裝て、毎晩甘酒を賣つては、天秤棒の痛さに肩息を吐いて居るのだと十郎は五郎を詰る。五郎は幾度か謝罪して、扨て云ふには、我家に重代傳つた商賣道具の傘骨丸が紛失して以來、傘の賣行が悪るくて、拵ふばかり拵へても、サッぱり捌けない、之れては何うにもならんから、些と氣が早や過ぎるが、暫し夢幻の境を吉原の傾

城町迄舞ひ下つて、出會ふ奴を片ッ端から喧嘩を吹きかけて、腰の物を抜かせる樣に仕かけては、一日も早く傘骨丸を見付けやうとて、花川戸の男伊達、江戸紫の助六になつたのだと云ふ。十郎祐成之を聞いて、ハタと感嘆し、手前は性來利發者だから、必ず何か仔細があることゝ思つたに、果してそんな遠謀とは天晴れぢや程に、私も今夜から手前と一所になつて、喧嘩を仕たいから、手解きに、此處で一ッ何んな鹽梅にやるものか敎へて呉れと云ふ。五郎は心得たりお手のものぢやと向ふから來る奴へとんと突き當つて、『やいさむらい、何ぜ乃公に突き當つた』から『措けやい』と、摺り足に、たんかを切る所迄敎へる。夫を見眞似に十郎は甘酒屋裝束で、天秤棒を振りながら、始めて蹈りの稽古に通つた格好に眞似をする、如何にも自然な滑稽になる、見物一同はクス〳〵笑ふ。紛失した刀とか、掛物とか、印籠とか云ふ種類のものを葛藤の起因とするのは、古作劇者の十八番の手て、下らない事に力んで見ては意地を立てる當時の社會が反映して居る。

所へ上手から二人の武士が入つて來る。五郎の助六は、行きなり、其の武士の刀を





抜き取つて見て、なまくら刀だ傘の骨は削れねいと投げ出して、『やい、さむらい跨潛れ』と、仲の町の眞中に立ちはだかる。十郎もそれを見習つて、天秤棒を杖に武士の前に立はたがつて、跨潛れと云ふあたりは、五郎の伊達姿と引き替へて、靑裝束の、色の白い、順しい、虫も殺さぬと言つた顏であるから、其の對照が如何にも面白い、氣の利いた、自然な滑稽になる。見物はやんやと聲を掛ける。

そこへ三浦屋の木戸から、揚卷に送られて出た客がある。トコヤンポを被つて、上品な武士らしい姿。五郎はヅカ〳〵と進んで、『やい、サムライ笠を取れ』と叫んで、近寄つて、紐を解いて笠を引ッたくつて見ると、何ぞ計らん、夫は四十女で、然かも傘問屋の主婦であるから吃驚り肝を潰ぶして引き退がる。十郎は、それとも知らず、跨くゞれと、立はだかつて見て、扨て顏を見合はせて、之も吃驚りゝ、穴があつたら入りたいと、腰掛け臺の下へもぐり込む、此の邊も自然な滑稽になつて嫌味が無い。傘問屋の主婦は、二人を前へ引き据へて、妾は之迄お前さん達の男振りに惚れをして、亭主の前を暗ましして隨分と無抵當で傘代の前貸しをして上げたものです、昨晩も、聖

天横町のおてん屋が、お前さんに酒が一合とこんにやくが二ッ貸しになつて居るからと妾へ嫌味を言ふから立て替へてやりました。それを些とも思ひやつても見れず……十郎さん迄が妾が當がつてやつた甘酒桶を投たらかして、今夜の喧嘩三味は何に事ですの。言譯があるなら言つて御覽と詰ぢる。五郎は幾度か謝罪して後、傘骨丸て削つた骨でなければ、傘が賣れぬ、さすれば、兄ぢや人に迄斯んな見ともない甘酒賣をさせなければならぬから、一日も早く傘骨丸を見付けやう手段に、心にもあらぬ喧嘩沙汰、以後は屹度改心しまして、電車の運轉手になつて、明治の御代迄なり下つて見るからと云ふ。主婦は始めて理由を聞かせられて、夫れてはモッと〳〵喧嘩を吹きかけて早く刀を見付けなさい、だが血を流してはならぬ、何んな事があつても勘忍が第一、お前さんに良い物を上げると、天眼通に未然を察して居たものと見え、腰に結び付けた風呂敷から紙子を出して着せ、一寸でも手荒い事すると、此の紙子は破ける、破けたら妾の體へ傷付けたも同然だから決して荒い事はせず勘忍せよと、戒めて十郎と共に去る。後に五郎の助六は、揚卷と二人臺へ腰かけて、紫の鉢巻が緩む迄に目尻りを下



げて居ると、先刻の髯爺が出て來て、年に似ぬちん〳〵が嵩じて、扇子で助六を打つた果てに狂氣の樣になつて、腰なる一刀を拔いて罪も血もない香爐臺を眞二つ物の見事に切り割る。助六は其の刀を抑へて之れぞ我が傘骨丸だと躍り上つたが、今荒だて、紙子を破つてはならぬと、揚卷の諫言にのろくなつて引ッ込む。何んと助六は馬鹿な奴だらう、命の綱と頼む傘骨丸と柳原の店頭に幾らもぶら下つて居る紙子一枚と、何れが重いかの辨へもない馬鹿者だ。問屋の主婦が何んと云はふと、紙子一枚何んだ、大義親を滅すなど云ふ大道は、義が一歩偏して行つて俠を生命とする男伊達には、呑み込めないのだ、江戸ッ子がり、粹がりは、遂ひに大義を解せず、パッ〳〵と火の子の樣に飛び廻つて、餘てもない飛び火を起すのだ。だが一方から考へると、此處は作者が手腕がある所で、平地に波瀾を起して、面白く、他愛もなく、文盲な見物をやんやと言はせるには、不自然な、無理な葛藤を發明しなくては、第一芝居を明けることが出來ない、役者も作者も、青裝束の甘酒賣りにならなければならない、そこてやつた無理算段、何にも藝術など云ふ六ケしいのてはなく、川原乞食の立廻りてあつたの

だ。

次の幕は五郎の助六が髯爺を打ち取つて傘骨丸を取返す場である。舞臺面は矢張り前の三浦屋の前、左手に大きな用水桶がある、助六は髪大童になり、白襦袢に着代へ拔身の刀を提げて花道から出て來て、四邊を窺ひ、用水桶の蔭に隱れる。そこへ髯爺は朝顏せんべいを伴に、揚卷に送られて三浦屋の木戸を出る、淺草の鐘が八ッを告ぐる。そこへ助六は躍り出て、刀を渡せと言ふ、髯爺は屹度覺悟の見えになり、乃公は此の刀を薪割にして、今に吉原を一手受負に薪屋を渡世する計劃で居るので、當節洋傘がある以上、助六傘などは不用だから順しく引ッ込んで居れ、さもなくば貴樣を切つて棄てると、鉢卷をし、上衣を脫いで、白襦袢一枚になり、傘骨丸を引拔いて助六と渡り合ひ、決戰五十餘合、助六遂ひに髯爺を仕止めて、刀を取り返す。所へ余力同心三十餘名の捕り手が向ふ。助六遁るゝに所なく小桶を被りて用水桶の中へ入る。水が舞臺へ溢れ滴れる、物凄い實感を挑發して、魚がしの哥連の血を沸かさせる。捕手は捜したが見當らず、一旦引き擧げる。助六は苦しさに堪へず、ズブ濡れ姿で傘骨丸



を喰へて用水桶を這ひ出て、武者振ひする。大向ふからは感に堪へた叫びが續々として起る。余り騷がしいもんだから捕手が又來て、あはや助六が搦め取られやうといふ一髪の危機に、揚卷は妖艶な仕掛け姿で仲へ割つて入り、仕掛けの裾で、助六を庇ばひ、大手を擴げて、者共待てと鶴の一聲、サー斯うなれア此の揚卷が相手だ、若し妾に指一本指すものがあつたら、此の吉原を闇にして見せると、江戸ッ子の意地、凄いたんかを切る。大向ふからは腸を絞る叫が起る。捕方一同又引揚げる。揚卷はホッと息。見ると可愛い大事の助六は、正體が無い、揚卷は咄嗟金襴の袂を惜氣もなく、用水桶に浸して、水を可愛い男の口に含ませる。大向ふの叫は今痙攣かと思はれる迄に伸いて聞こえる。

ふつと、助六は目を開いて見廻はす。『助六さんお氣が付かれて』、『オー揚卷か』見合はす目と目、大向からは『いよ千兩！』『して、刀は手に入りましたか』『オ、喜んで呉れ、此の通り、……明日からは天下晴れて、其方は自由廢業、今戸邊の貸長屋へ世帶を持つて、俺れは此の傘骨丸で、身を粉に、骨を削れア、大丈夫食ふて行けるわ：

……『と、兩人暫し夢幻、見物も夢幻。

モウ、廓は捕方に四方圍まれて脱け出る道がない、どうしやうと見廻すと、先刻捕方共が立かけた儘の梯子がある。『助六さん、此の梯子を上つて屋根伝ひに、……妾は田圃で待つて居ます』、『オー合點だ』と、助六は梯子を四段迄上つた所を『一寸助六さん』と、身を一轉裾を抑へて、『揚巻』と見下ろす稀代の伊達男を斜めに見上げる、一幅錦繪裏の光景。見物は總身汗に蒸されて骨迄が蕩けて了つた。チョンと打つて、幕はゆるやかに横に引かれた。

冴へて透る聲を腹一杯に、舞臺の眞中に立ちはだかつて『野郎跨潜れ！』と、叫んだ羽左衛門の赤襦袢を捲くり上げて傲然と見下した意氣は、之を男の目から見て、威勢の好いことは言はずもあれ、内に万斛の惡熱を藏へて、外に菩薩の溫容を示す女共の目に、どれ丈けの感想を與へるかは、余が想像の遠く及ばない所である。



# 惡あがき

◎銅に臭あり、金に光あり。より多くの用を成すものはより多くの臭氣あり、己が媳の眞情は辛氣臭く、他の女房のお世辭は馨ばし。

◎主義と、面の皮と、其の賣るに於て御同業樣なり。かくて白首藝妓は鐵面議員の好述なり、待合の電氣はお互樣の魂膽を直下に照せり。

◎二人て食へば、御馳走は半分減るに非ずや、慾と樂とは常に反比例す。

◎根津權現前に神易と看板かけて、美濃紙を板に貼り付けたる掲示の見出しを理由と書けるは後の高臺に大學、高等學校を負へる爲にもやと可笑しく、一軒隔いて隣りに、新製菓子喫食處と出たのは實に新製なり、之れては孟母三遷も考へものなり。

◎四閉八塞の下宿の六疊、加へて風まて引いた床の中に、百方策盡さの電信爲替を、

又しても、此度限りと郷里の親父へ言ひ送れるが、取る手遲しや返電の誤字が文句を爲さず、君々と相談掛けたるを、年上なる口惡き友の、どうらと引つたくりて、なんだ『金やれぬ、死ねくたばれさ』と、切つて棄てる語調を、此方は血相變へて脅えたるが、病勢一轉、やがて肺になりて、三年と經たず、故山の土となれり。

◎勝手に怒鳴るべき世なり、思ふが儘に振る舞ふべき世なり、成功とは圖々しく押し出すことの結果なり、之れやがて平凡を天才たらしむる秘訣なり。

○基督教國を一神教の土地と思ふは非なり、運命の神、戀の神、希望の神、詩の神など、八百萬神外の神迄澤山あるに非ずや。明治の三十九年五月になりて、戰勝の余威が小説の神、獨歩君を中央公論紙上に産み出せるは、海石に神の國丈けありて、西洋の神々も之には一寸面喰ふなるべし。

◎少なく與ふるものは金で取り、多く與ふるものは命で取る、親切とは多大の利を孕むべき債券なり、斯間、口で與へて、目で取るものは電車の席を庇髪に讓る角帽の氣轉なり。



◎暴食は胃を傷ぶり、漁食は鼻を墜とす。異る所は外に現はるゝと現はれざるとに在り、品行方正とは膓にあらず角立つた鼻のことなり。

◎落花も紛々なり、臭氣も紛々なり。古來中華國先生が所定めず落花を逐ふて糞便せる證據なり、視覺と嗅覺の紛亂なり、遂ひには紛々として四百州を擧げて目鼻の明けるものなきに終らずんば幸なり。

◎雨の翌日、四丁目を行く、唯だ見る、とろ〳〵と漆を流せるばかり、朝日に照り映ゆる泥濘の上を、板橋通ひのガタ馬車、人力車、自轉車の織るが如く、烏鷺の歩調急はしく徒歩する角帽海老茶の横面まで飛沫を蹴上げて威勢能く走する樣の、實に都大路の壯麗の景を見ずんば、安んぞ新曲物の冒頭を得んやと、一氣呵して成る、『揑ね返る、しるこながらの泥濘の飛沫、都大路の眺めかな』、之よりは大薩摩になり、『夫れ本郷の高臺、向ケ岡の眞只中、棟瓦造りの建物を名けて大學と云ふとかや、星や菫の天才が、空に溢るゝ天の河、眞砂の數と繁けれど、戀は無常とシャーマンの、詩人が寓言今てゝに、見る目優男の關欽哉……』と、何れは『新曲青春の歌』と新體詩家

のお手のものなるべし。

◎誰某は何處の畑の出なりと、人參午蒡一からげに、文土の下馬評されたるを聞さて我は思へり、さらば紅葉門下は坂の出なり、露伴門下は堤の出なり、早稲田は田圃の出なり、赤門は黄埃の出なり、之を酔拂ひの口調に、某は田圃の奴なり、某は堤の奴なりと言へば百姓らしく聞こえ、某は坂の奴なり、某は黄埃の奴なりと言へば町人らしく聞こゆ、之を旗分けにすれば、前者は青なり、後者は適切に赤なり。

◎然れど田圃も今は町になれり、軟風に綠波を戰がして、遠く紅塵を絶せる早稲田も、今は赤看板の南京そばと、黒板圍ひの寄宿舍と、御安直のミルクホールと、貸長家仕立の文房具店との陋ろしき新開路を、學者乞食の急々と往復りする修羅場と化し終れり、裏の運動場には、赭色の埃が渦を卷いて飛び揚がれり。

◎ニコライの鐘は妖音なり。ゴーン〳〵と怪しげなる黒坊主頭の鐘塔より洩れ出づる音は底知れざる暗黒の響なり、一撞き毎にドス黒き舌吐き出して、彼の坊主屋背が突ッ立ち上るにあらずや、塔上の十字架には朝な夕なに怪しの光り輝けり。



◎上野の鐘は花吹雪の象徴なり。ボーンと鳴れば、花はヒラ〳〵と散るにあらずや、あの鐘が鳴らずば櫻花は長へに散るまじきを、實に梵は無常の響なり、魂魄暫じ半空に漂ふては、やがて不忍の池へ消え入る音なり、眞砂座の舞臺に聞く心中の合圖なり。

◎淺草の鐘は大慈大恩のオーンとばかりに、賽錢箱を氣にして唸れる人寄せの鐘なり、之を十二階の上より見れば、蟻の如く這ひ寄る幾萬の善男善女等が、一家眷族七世の孫子迄の果報を購はんとて、慾深かくも縞の財布から摺み出せる只た一錢の銅貨を塵よ積れと、徴發する呼鐘なり、實に三寸の金佛に千坪の屋根面を構へたる法螺吹きの響なり、一撞き毎に、兵隊と、土方と書生とを、女郎屋と、銘酒屋と、碁會所と、新聞縱覽所と、大弓場に呼び集へる淫道の響なり。其の音を形容して殷々と言ふは當れり、紂王以來殷は淫に通ずるに非ずや。

◎砲兵工廠の汽笛を、數十の鯨が背を並べて海上を進行しつゝ咆へるにも似たりと言へるは想像丈けに面白し。白山邊にウギャーンと聞こえる某工場の汽笛を、鄕里より

來れる男のオヤと耳欹てゝ『郷地て本行寺の坊主がお經を讀む樣な』。

片雲集終




明治三十九年八月廿日印刷
明治三十九年八月廿五日發行

片雲集奥附
定價金六十錢

著作者　海田貞敏
發行者　朝山勇四郎　東京市淺草區須賀町貳番地
印刷者　藤本龍吉　東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地


不許複製


發行所　東京市淺草區須賀町貳番地　敬文社

10-441

文學博士三宅雄次郎校閲　文學士德谷豐之助
朝山勇四郎共著

# 三版 普通術語辭彙

菊版總クロース製
金文字入裝本佳麗　全一冊定價壹圓五拾錢紙數七百頁餘

本書は現時遍く活用せられ、總ての方面に渉りて思想の根蔕をなし、而かも多く暗澁に漫解妄用せられつゝある百科の最切要なる術語、例へば、具體、抽象、主觀、客觀、形式、內容、絕對、相對、超絕、實在、理想、現實、理性、人生、教義、教典、神秘、衝動、究竟、過程、體制、標徵、觀念、概念、知覺、感覺、異端、涅槃、政體、政黨、政策、ロマンチック、インスピレーション、オーソリチー、ツラスト、積極、消極、演繹、歸納、抔云ふ、或は、又、一派の主義を表白する社會主義、帝國主義、神秘主義、自然主義、人文主義、理想派、寫實派、印象派、抔云ふが如きものに對し、最も平明懇切なる解釋を加ふ、健全なる思想を獲得し、現代知識の眞髓を味はゝんと欲する諸氏は、須らく一本を座右に供するの用あるべし。

發行所　東京市貳須賀町淺草區番地　敬文社

30
461

096266-000-7

30-461

# 片雲集

薄田　貞敏／著

M39
DBR-0547